

# 弥生文化の輪郭

## 灌漑式水田稲作は弥生文化の指標なのか

The Frame of the Yayoi Culture : Is Wet Rice Cultivation with Irrigation System  
an Indicator of the Yayoi Culture?

### 藤尾慎一郎

FUJIO Shin'ichiro

はじめに

① 藤本強の前一千年紀の列島内諸文化

② 弥生文化とはどんな文化なのか

③ 弥生文化の質的要素

④ 「中の文化」の細分

⑤ 弥生文化の輪郭

おわりに

#### 【論文要旨】

本稿では、弥生文化を、「灌漑式水田稲作を選択的な生業構造の中に位置づけて、生産基盤とする農耕社会の形成へと進み、それを維持するための弥生祭祀を行う文化」と定義し、どの地域のどの時期があてはまるのかという、弥生文化の輪郭について考えた。

まず、灌漑式水田稲作を行い、環壕集落や方形周溝墓の存在から、弥生祭祀の存在を明確に認められる、宮崎～利根川までを横の輪郭とした。次に各地で選択的な生業構造の中に位置づけた灌漑式水田稲作が始まり、古墳が成立するまでを縦の輪郭とした。その結果、前10世紀後半以降の九州北部、前8～前6世紀以降の九州北部を除く西日本、前3世紀半ば以降の中部・南関東が先の定義にあてはまることがわかった。

したがって弥生文化は、地域的にも時期的にもかなり限定されていることや、灌漑式水田稲作だけでは弥生文化と規定できないことは明らかである。古墳文化は、これまで弥生文化に後続すると考えられてきたが、今回の定義によって弥生文化から外れる北関東～東北中部や鹿児島でも、西日本とほぼ同じ時期に前方後円墳が造られることが知られているからである。

したがって、利根川以西の地域には、生産力発展の延長線上に社会や祭祀が弥生化して、古墳が造られるという、これまでの理解があてはまるが、利根川から北の地域や鹿児島にはあてはまらない。古墳は、農耕社会化したのちに政治社会化した弥生文化の地域と、政治社会化しなかったが、網羅的な生業構造の中で、灌漑式水田稲作を行っていた地域において、ほぼ同時期に成立する。ここに古墳の成立を理解するためのヒントの1つが隠されている。

【キーワード】 弥生長期編年、ボカシの文化、網羅的・選択的生業構造、拡大再生産

## はじめに

前10世紀から後3世紀までの日本列島に広がっていたのが弥生文化だけではないことは周知の事実である。北海道には前4世紀(弥生前期末併行期)以降に続縄文文化が、奄美・沖縄には貝塚前・後期文化が広がっていた。つまり灌漑式水田稲作のはじまりは、北海道や奄美・沖縄の人びとが、九州・四国・本州の人びととは異なる歴史を歩み始めたきっかけとなったのである。

以後、日本列島に展開する諸文化を通時的にみると、灌漑式水田稲作(以下、弥生稲作)を生活の基本とする人びとがいる本州・四国・九州、その北には明治時代まで本格的な農耕を行わない北海道、その南には後11世紀後半のグスク時代の開始まで本格的農業を行わず、交易によって必要なものを手に入れていた人びとがいた奄美・沖縄が位置するという構造をみせる(図1)。藤本強はこうした日本歴史を通じてみられる3つの文化を、「北の文化」「中の文化」「南の文化」と表現した[藤本1982]。

さらに藤本は、「中の文化」と「北の文化」の間にある東北北部と、「中の文化」と「南の文化」の間にある九州南部・薩南諸島に、両方の中間的な様相を見せる文化として「ボカシ」の地域を設定した[藤本1988]。この図から、藤本が東北北部に弥生文化を認めていないことがわかるであろう。<sup>(2)</sup> 弥生文化を「もう後戻りしない農耕社会の成立」と規定する藤本の定義にもとづいたものである。

このように弥生文化の段階の日本列島には、「北の文化」「中の文化」「南の文化」、そして北の「ボカシ」の文化の、あわせて4つの文化が存在していたことになる。弥生文化の成立と同時にすべての文化が成立したわけではないが、

弥生稲作の開始年代が約500年早い前10世紀までさかのぼることになると、弥生文化とほかの列島内諸文化との関係にも影響が及ぶことが予想される。

弥生稲作の開始年代がさかのぼることの影響は「中の文化」にも及ぶ。「中の文化」の地域で弥生稲作が始まる前には縄文晩期文化が広がっていたので、弥生稲作を早く始めた地域ほど縄文晩期文化の存続幅は短くなる。たとえば九州北部では300年以下なのに対して、近畿では約500年である。しかし「中の文化」の中ではもっとも遅い前3～前2世紀に弥生稲作を始めた中部高地や関東南部は少し複雑である。普通なら前

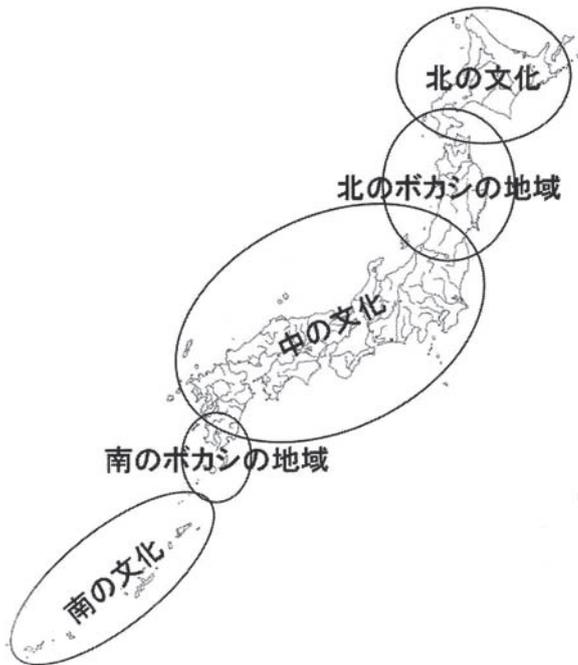


図1 弥生時代以降の日本列島の諸文化 [藤本1988] より転載

10～前3世紀までの約700年間は縄文晩期文化になりそうだが、少なくとも700年間のうち、西日本の弥生前～中期前半に併行する約500年間は、畑作や稲作を行っていることなどを根拠に、東日本の多くの研究者は、弥生前・中期文化と考えている。

このように「中の文化」の中には、弥生文化や縄文晩期文化、および弥生稲作を行っていないのに弥生文化とよばれる文化が500年近く存在していたことになるので、「中の文化」は弥生文化だけではない多文化併存状態にあったことを意味している。九州で弥生稲作が始まると瞬く間に本州へと広まって弥生文化一色になるという、これまでのイメージとは明らかに異なっていることがわかる。

このように中部高地や関東南部の縄文晩期以降～弥生稲作開始以前にみられる、縄文的要素と弥生的要素の両方を見せる時期を、縦の「ボカシ」の時期とよんだ〔藤尾2011〕。藤本のボカシの地域が東北北部や九州南部のように地域的に設定された、いわば横の「ボカシ」の地域だとすれば、弥生稲作が始まる前にみられる縄文文化と弥生文化の中間的な様相がみられる時期を、時間的に設定された縦の「ボカシ」の時期とすることができよう。

見直しが必要なのは北の「ボカシ」の地域も同様である。筆者は以前から水田稲作を始めるものの数百年後にやめてしまい、もとの採集狩猟生活に戻る東北北部の水田稲作をどのように理解すればよいのか考えてきた〔藤尾2000〕。藤本が弥生文化の指標の一つに「もう後戻りをしない農耕社会の成立」をあげていることを適用すれば、東北北部を弥生文化としてみることはできないことは明らかなのだが、ここにも弥生長期編年が影響を与えている。

西日本で弥生文化が1,200年あまりもつづいている間、東北北部では縄文晩期文化(500年)→水田稲作を行う文化(300年)→採集狩猟文化(400年)と、数百年単位で生活様式が変遷している。同じ出自を持つ人びととその子孫たちが、数百年ごとに生業を変えていたと考える研究者が多いが、弥生文化の存続期間が長くなった分、水田稲作が行われていた期間が150年から300年に倍増するとなると、なおさら、どうして途中でやめてしまうのかという疑問が強くなる。

このように弥生長期編年のもとで、水田稲作を行う多様な諸文化の解析を進める事は、逆に弥生文化の特徴を浮き彫りにして輪郭を明らかにすることにもつながるであろう。灌漑式水田稲作を行っていれば弥生文化なのか、という本稿の目的に迫ることができると思う。

本稿では以下の手順でこの問題に迫ってみたい。

- 1 九州北部で弥生稲作が始まり、近畿で前方後円墳が出現するまでの約1,200年間に存在した弥生文化以外の列島内諸文化のうち、水田稲作を行わない続縄文文化と貝塚後期文化と、弥生文化との違いも、いまや生産手段の違いだけでは説明できなくなっている現状を報告する。
- 2 弥生文化の指標がどのように考えられてきたのか、研究史をおさえたあと、弥生文化が、中国・韓国を含む東アジアの農耕文化のなかでどのような特徴を持つのか。また時間的に連続する縄文、古墳文化と何が違うのかを明らかにする。
- 3 藤本が安定した弥生文化として設定した「中の文化」は、経済・社会・祭祀という横断的な3つの側面や、縄文系・大陸系・弥生系という3つの系譜から、いくつかに分かれること。「中の文化」では、水田稲作が本格的に始まる前には縦の「ボカシ」の時期とよぶ段階が存在することを明らかにする。

- 4 水田稲作を行う目的の違いから「中の文化」の水田稲作文化を細分する。さらに水田稲作がもっとも広がっていた前3～前2世紀頃の日本列島上に存在した諸文化の違いを明らかにする。
- 5 弥生文化は、灌漑式水田稲作を行っているだけで規定できるのかどうかを考察した。水田稲作の目的が、拡大再生産によって余剰を増やし、農耕社会化、政治社会化をめざすことにあり、そのための弥生祭祀を行う文化と考えた。その結果、「中の文化」は、弥生文化と弥生文化ではない文化に分かれた。古墳文化は、弥生文化と、拡大再生産を目的とせず政治社会化を志向しない水田稲作文化に後続する文化であることを示し、そのことが古墳成立の意味を考える際の重要な手がかりの1つである可能性を明らかにした。

## ①……………藤本強の前一千年紀の列島内諸文化 —統縄文・弥生・貝塚後期文化・ボカシの地域

### (1)「中の文化」

北・中・南の文化の最新動向をみる前に、年代表記だけを弥生長期編年に置き換えて藤本の考え方をおさらいしておく。生態系に応じて特色ある7つの採集狩猟文化に分かれていた縄文文化は、北海道から沖縄本島までの地域に広がっており、韓半島や北東シベリアとは明確に区別され、縄文文化との一体性が重視されると藤本はいう〔藤本2009〕。最近では縄文文化の一体性自体にも疑問が投げかけられ始めているが、ここは藤本の定義にしたがっておく。

2002年に筆者は、縄文文化を、「日本列島の島嶼部にみられる新石器文化東アジア類型の一つ」として捉えた〔藤尾2002:212頁〕。日本列島の島嶼部の人びとが、最終氷期の最寒冷期以降に起こった、大規模な気候変動に対して見せた適応行動の一つとして捉えたのである。日本列島だけでなく韓半島、中国東北部、沿海州など、東アジア中緯度地帯に位置する地域の人びとは、ナラ林の森林性食料を土器や植物加工具を発達させることによって、高度に利用して適応していた。その中でも縄文土器・弓矢・定住の始まりなどの特徴をもつ点で、日本列島の住人の特徴として大陸諸文化とは区別できる。

前11世紀、山東半島起源の水田稲作農耕を生活の基礎とする文化が韓半島南西部に拡散し、そこで遼寧式銅剣を象徴とする北方系青銅器文化に代表される祭祀を組み込み、水田稲作を生産基盤とする韓半島青銅器文化が成立。前10世紀後半に九州北部へ持ち込まれると、約800年かけて九州から東北地方までの地域に水田稲作が広がっていった。このなかでも水田稲作を受け入れたら二度と採集狩猟生活に戻らなかった東北中部から九州中部までの範囲を、「中の文化」と藤本はよんだ。「中の文化」は弥生稲作を生産基盤としてムラを作り、やがてムラを集めて小さなクニが生まれ、クニ同士による連合を出現させる。古墳時代のはじまりである。クニ連合の中から統一国家が生まれる。古代日本の登場である。やがて中世、近世へと推移する「中の文化」こそ、これまで私たちが普通に習ってきた日本の歴史なのである。

しかし縄文文化のように一体性のあるものとして、水田稲作を指標に「中の文化」を弥生文化としてくることができるのであろうか。まず縄文後・晩期にコメが存在した可能性が否定できない以上、現状では「稲作」という指標ではくくることはできない。では灌漑式水田稲作でなら、くく

れるだろうか。これも「湧水型水田」とよばれている原初的な水田との線引きが難しいので、やはり現状では難しい。そこでここでは「弥生文化とは、灌漑式水田稲作を選択的生業構造の中に位置づけた上でそれに特化し、一端始めれば戻ることなく古墳文化へと連続していく文化である」と仮定して話を進める。弥生稲作を行うためにもっとも適した労働組織や、流通の仕組みに再編成されていることが前提なので、もはや採集狩猟生活に戻ることはできない。

## (2)「北の文化」—統縄文文化

山内清男が設定した統縄文文化は、後続する擦文文化やアイヌ文化へと続く「北の文化」の出発点として位置づけられている〔山内 1933〕。水田稲作ができないというネガティブなイメージがつきまとう「統縄文」という用語だが、生育条件の厳しい北海道ではイネを育てるよりも、生態環境に適した漁撈という生業を改良した方が、はるかに合理的であったと石川日出志は理解する〔石川 2010〕。山内も、弥生文化と同じく縄文文化を母体として生まれた一類型の、北海道バージョンとして設定したのであり、単に縄文文化の伝統を引き継いだというわけではない。東北の弥生文化とも種々の関係を結び、すでに変質しているので、縄文文化の範疇からは逸脱しているという。

さらに交易を重視するのが鈴木信である。鈴木は統縄文文化の特徴として「生業の特化」、「威信の狩猟漁撈の盛行」、「第二の道具の広域交換」をあげる〔鈴木 2009〕。特に縄文と同じく網羅的な生業構造を維持するものの、漁撈活動にかなり重点をおいている点が生業の特化である。イネを作りたいけど寒くて作れなかった、というのではない。

こうした漁撈活動への特化が、副葬品を持つ個人墓が発達する要因とも考えられ、副葬品をもたない関東や中部地方の農耕文化にはみられないほど、階層分化が進んでいた可能性がある。

## (3)「南の文化」—貝塚後期文化

奄美・沖縄諸島に広がる珊瑚礁という生態系に特化した漁撈活動と、九州・先島・韓半島との直接・間接の交流で、必要な物資を入手していた文化である。特に有名なのが九州北部との間で行われた南海産の貝を対象とする交易である。開始時期は弥生早期の前 10 世紀後半説と、弥生前期の前 7 世紀説があり、統一されていない。当初は西北九州の弥生人が相手だったが、次第に福岡・佐賀平野を中心に分布する、成人甕棺を墓制とする弥生人相手へとシフトすると同時に、両者を仲介する有明海沿岸や薩摩・大隅地域の人びとを巻き込んで、絹、コメ、雑穀、鉄、鏡、古銭、ガラスなどの大陸系文物を入手していた。

のちに珊瑚礁の貝を資源にした東アジア地域との交易活動が展開し、もはや漁撈を中心とした採集経済の原始社会であったという見方はできない。交易型社会の始まりと捉えるのが現状である。

統縄文文化と異なるのが副葬品を持つ墓が、種子島にしかみられないことである。交易をスムーズに進める統括者の存在は予想できても、特定個人の集権化は、九州島にもっとも近い種子島でしか達成されなかったと考えられる。もちろん奈良時代以降のヤコウガイ交易以降となると話は別である。

## (4)まとめ

縄文文化と貝塚後期文化は、縄文文化と同じ網羅的な生業構造を維持していたとはいっても、漁撈活動と交易に重点をおいた経済的側面を持っているという意味では、縄文文化の伝統を単に引き継いでいるだけでなく、周辺諸文化との関係に応じて特徴的な内容をもつという点で、すでに縄文文化の範疇からは逸脱している。その意味では水田稲作という農耕に重きをおいた弥生文化と共通すると考えてもよいだろう。すなわち、中の文化・北の文化・南の文化の分立はいずれも、特定の経済的側面に重点をおくことで起こったと考えられる。

## ②……………弥生文化とはどんな文化なのか—弥生文化の指標

### (1) 複数の指標で考えられた1970年代以前

現在の東京大学農学部校内で見つかった1個の壺を契機に、50年ほどかけて1つの独立した文化として設定された弥生文化は、まさしく弥生土器の時代の文化であった。弥生土器に伴って見つかるイネや金属器が次々に指標に加えられていき、やがて1930年代には弥生土器、農業（木製農具や大陸系磨製石器）、金属器（鉄器、青銅器）という3大要素が設定される。特に弥生土器はもともと見つかりやすい考古資料なので、弥生土器が見つかり水田稲作が行われていたと見なされてきた。

1950～1960年代にかけて、最古の弥生土器である板付I式土器に伴う大陸系磨製石器や鉄器が見つかり、弥生文化はその当初から農業を行い、鉄器を使う文化と考えられたが、これは世界でも唯一の先史文化であると総括される。なぜなら、弥生文化以外の先史文化では、農業の開始後数百～数千年たないと金属器は現れないからである。しかも青銅器が先で鉄器は後出するのが常なので、鉄器が先行するのは弥生文化だけだったからである。

こうした特徴を備えた弥生文化がどのようにして成立したのか、その系譜とプロセスをめぐる考え方には、当初から大陸の要素を重視する小林行雄〔小林1951〕と、縄文の要素を重視する杉原莊介〔杉原1977〕<sup>(3)</sup>という2つの意見があった。

もともと3大要素のなかでも、弥生土器と農業は、縄文土器や縄文農耕との系譜関係をどの程度見込むかによって、研究者ごとに意見の違いが見られたので、縄文文化には認められない金属器が弥生文化成立に果たした役割が相対的に高まったといえよう。小林は、板付I式に伴って出土したとされる熊本県斎藤山遺跡出土鉄器を重視し、鉄器こそが弥生文化を成立させる要素として、大陸系譜の要素が強い弥生文化という見方を定着させた。

一方、杉原莊介は列島各地における弥生文化の波及と定着という視点から弥生文化の成立を考えたこともあって、もともと弥生文化の中に含まれている縄文系譜を重視したのであろう。森貞次郎〔森1960〕もこの路線にある。

### (2) 単独の指標の重視—水田稲作という経済的側面

3大要素の中でもとくに農業を重視して「日本で食糧生産を基礎とする生活が始まった時代である」と定義したのは佐原真である〔佐原1975:114頁〕。この定義によってこれまで弥生土器とい

う技術的側面で縄文文化と画していた時代区分から、水田稲作という経済的側面で時代区分する方向へと転換が図られた。食料採集民から食料生産民への転換を意味する新石器革命を意識して、弥生文化の成立が考えられたのである。

佐原がこうした見解を示したのは、古墳の開始期のように土器では画することが難しくなってきた現状の打開と、縄文後・晩期農耕と弥生農耕の違いをどう位置づけるのか、という2点に絞られる。前者に関しては縄文から弥生だけに限ったことではなく、前方後円墳の成立を指標とする弥生から古墳への移行など、土器以外にその時代を特徴づける指標で区分するという方向に、考古学全体が変わる時期にあたっていたといえよう。

後者については、生業全体の中で植物栽培がどのような位置づけにあったのか、という視点もなく、ただ穀物や雑穀栽培の存否だけで議論されていた、当時の縄文農耕論に対する強い警鐘があった〔佐原1968〕<sup>(5)</sup>。

こうした農業という単独の指標の重視は、やがて時代区分論争として新たな局面を迎えることとなり、そのなかで弥生文化の指標に関する議論が活発化する。

### (3) 時代区分論争と弥生文化の指標

1978年からの数年間に九州北部で行われた発掘調査の結果、弥生文化の3大指標とされたうちの農業と金属器が、最古の弥生土器である板付I式よりも古い突帯文土器に伴うことがわかってきた。縄文晩期最終末の灌漑施設を備えた定型的な水田址と、大陸系磨製石器に木製農具、鉄器の数々は、どれも弥生文化の所産として遜色のないものであった。この事実を縄文晩期のものと捉えるのか、弥生文化のものと捉えるのかで研究者の意見は分かれ、学界を巻き込んだ時代区分論争へと発展した〔近藤1985〕。

佐原の先の定義にしたがえば当然、弥生文化ということになる。目の前に広がる遺構や遺物の数々は、それを使った人びとが、水田稲作を生活の基本としていたことを示すのに、余りあるものだったからである。佐原は弥生時代の土器を弥生土器と定義していたので、定型化した水田に伴う突帯文土器は弥生土器ということになり、弥生文化の3大指標はすべて板付I式よりさかのぼることになった。一方、弥生土器の時代を弥生時代や弥生文化と考える人びとにとっては、水田や鉄器がいくらさかのぼろうが、最古の弥生土器である板付I式以前は縄文晩期、ということになる。

弥生文化の土器が弥生土器であるという定義の問題ではなく、突帯文土器自身が弥生土器の特徴を備えているかどうかを分析したのが筆者である。その結果、弥生土器の特徴を備えていると認め、農業と鉄器をあわせて3大要素が存在する突帯文土器段階から弥生文化であると主張した〔藤尾1988〕。

いずれにしても水田稲作を弥生文化の指標とする限り、弥生文化の3大要素が同時に出現する点にかわりなく、当時の年代観で板付I式より百年ほど古い段階に、3つがそろっていたことが明らかになったのである。

しかしこうした技術・経済様式に基づいた時代区分や弥生文化の指標は、90年代から批判されるようになる。

#### (4) 社会的・祭祀的要素の重視

田崎博之〔田崎1986〕、泉拓良〔1990〕、武末純一〔武末1993〕、白石太一郎〔白石1993〕に代表されるのは、水田稲作の単なる開始ではなく、始まったことによって起こる社会や祭祀の質的な変化を重視して、時代を画すべきだという考え方である。技術様式に比べると考古学的に認識するためにはハードルの高い指標（見つかりにくい）である環壕集落、戦い、農耕祭祀などの出現を目安とすべきという考え方である。これらの資料は土器や石器などの普遍的な考古資料と違って、存在したことを証明することが難しい。たとえば武末は「水田を基盤とする農業経済構造が確立した時代」（181頁）とか、「弥生時代に始まる農業経済では余剰を限りなく増やしていこうとする体系が確立していること」（181頁）などをあげる。白石も「考古学的な時期区分としてはともかく、歴史認識の手段としての時代区分の問題としては、当然、板付I式の段階に想定しうる新しい農耕社会の成立に画期を求めべきであろう。」（250頁）と説いている。

これらの論説がみられた当時、環壕集落は板付I式に伴うものが最古だったので、彼らも弥生文化の上限をさかのぼらせる必要性はないと考えていたが、その後、福岡市那珂遺跡で突帯文土器単純段階の環壕集落が、糸島市新町遺跡で突帯文土器単純段階に戦いが原因でなくなったと考えられる戦死者の墓が見つかったので、結果的には弥生文化の上限は板付I式よりもさかのぼることとなった。ただ弥生短期編年のもとではわずかに数十年、というきわめて短期間に農耕社会化が達成されたと考えられることになったのである。

したがって弥生文化の要素として経済面に加えて社会面を重視する見方は、こうした時代区分論争のなかから出てきたと考えている。

次に祭祀的側面を重視する考え方が出てくるようになったのは、弥生文化が成立するにあたって縄文人（在来人）と渡来人のどちらが主体的な役割を果たしたのか、という主体者論争からである。九州の研究者は在来人が弥生化していく過程を、遺跡や遺物から具体的にトレースできるため、縄文人主体論を唱えがちであるのに対し、近畿の研究者はそのような具体的な証拠よりも、定義的な部分からこの問題にはいるため、渡来人主体論が多いという傾向がある。

東北の水田稲作民と九州の水田稲作民との対比から、主体者論争に取り組んだのが宇野隆夫である。宇野は、縄文人が水田稲作を始めるときの精神的な要因を重視する。環壕集落を代表とする社会構造や弥生的世界観への転換をはじめ、農耕儀礼を中心とする宗教への転換までもを包括して精神的な問題と見なし、総合的に縄文から弥生への転換を考えることの重要性を説いた〔宇野1996〕。これは採集狩猟生活から水田稲作を中心とする生活に転換するに際しては、単に生業を変える、といったレベルの問題ではなく、水田稲作を行う上で必要なさまざまな精神的ファクター、つまり世界観、自然観、祖先観などのすべての面を、イネに対して特化させていくという方針を採用しない限り、灌漑式水田稲作に転換できないという考えである〔藤尾2003〕。この点は、東北北部の水田稲作の実態を考える上でもポイントなるので、のちに改めて論じたい。

#### (5) 系譜を重視する考え方

経済・社会・祭祀という3つの側面で語られる横断的な指標で弥生文化を特徴づけるのではなく、

時間的に縦に貫かれた系譜、すなわち縄文系、大陸系、弥生系という系譜で弥生文化を考える説が2000年以降、顕著になってくる。

もともと山内清男が提唱し、佐原真に引き継がれ、現在では石川日出志や設楽博己を主な論客とする。農業にしても金属器にしても、環壕集落や青銅器にしてもすべてが大陸系譜なので、横断的な指標ではどうしても大陸系譜が重視され、縄文文化から引き継がれた伝統的な要素が、ないがしろにされるという強い危機感がある。

設楽は、政治史的視点だけを強調する弥生文化観は大陸系譜だけの要素を強調したもので、伝統的な縄文系譜の要素がないがしろにされるという危惧から、系譜ごとの割合の違いで大陸系が顕著な地域、縄文系が顕著な地域という視点で弥生文化を二つに分けた〔設楽2000〕。すなわち大陸系弥生文化とは、朝鮮半島起源の水田稲作農耕文化を受容することによって政治的な社会を形成した、あるいはそうした動きを潜在的に持つ文化であると定義し、東北部～九州の範囲に適用した。さらに利根川以西の環壕集落をもつ範囲をA、利根川以北の環壕集落がなく地域社会統合の気配のない範囲をBとして、弥生文化を細分した。

次に縄文文化の伝統が強い農耕文化として縄文系弥生文化を、中部高地や関東など弥生前期～中期前半の条痕土器分布圏に限って適用。水田稲作や畑作を生業とするものの比率は低く、壺棺再葬墓や土偶型容器など特徴的な器物を持つと定義した。

設楽は、「政治史的な視点から離れて生活文化史的な視点に立てば、政治的社会を形成しない農耕文化があることや、その中にもいくつかの変異があることなど、弥生文化が多様な広がりを持つことが認識されよう」(97頁)として、系譜を重んじ弥生文化の地域性として捉える考え方を示したのである。筆者も政治的社会を形成しない農耕文化があることには同意するが、それを弥生文化のなかに含める理由について、もう少し説明がほしいと考えている。

次に九州・四国・本州に広がる灌漑稲作を、もっとも基底的な要素としてもつ文化を弥生文化と定義し、縄文晩期文化から引き継いだ地域性と、その後加わってできあがった多様な文化を、弥生文化の地域性と捉えるのが石川である〔石川2010〕。大陸系、縄文系、弥生系の要素をすべて均等に重視して弥生文化を評価する石川は、渡来人の大量渡来によって縄文文化が弥生文化にとってかわったという、大陸系譜偏重の考え方には断固反対の立場で、弥生文化はあくまでも縄文人が受け入れて緩やかに移行した多様な文化として捉える点に特徴がある。

社会的側面や祭祀的側面を、弥生文化かそうでないのかを決める際の決め手と考える筆者と、これらを弥生文化の多様性と捉える設楽や石川との違いがここにある。弥生文化の輪郭を考える上で避けては通れない問題なので後述する。以上が弥生文化の指標に関する研究史である。これから弥生文化はどのような文化なのか、まずは東アジアの農耕を行う文化のなかではどのように位置づけられるのか、という点と、縄文文化や古墳文化との違いは何か、という点について、少し広い視野から検討しておこう。

## (6) 農耕の起源地と拡散地

J・ダイヤモンドは、農耕が始まる過程を3つにパターン化している〔ダイヤモンド2000〕。穀物の野生種や家畜の野生種が存在し、それらを自ら栽培化・家畜化して農業や牧畜を始めた起源地。

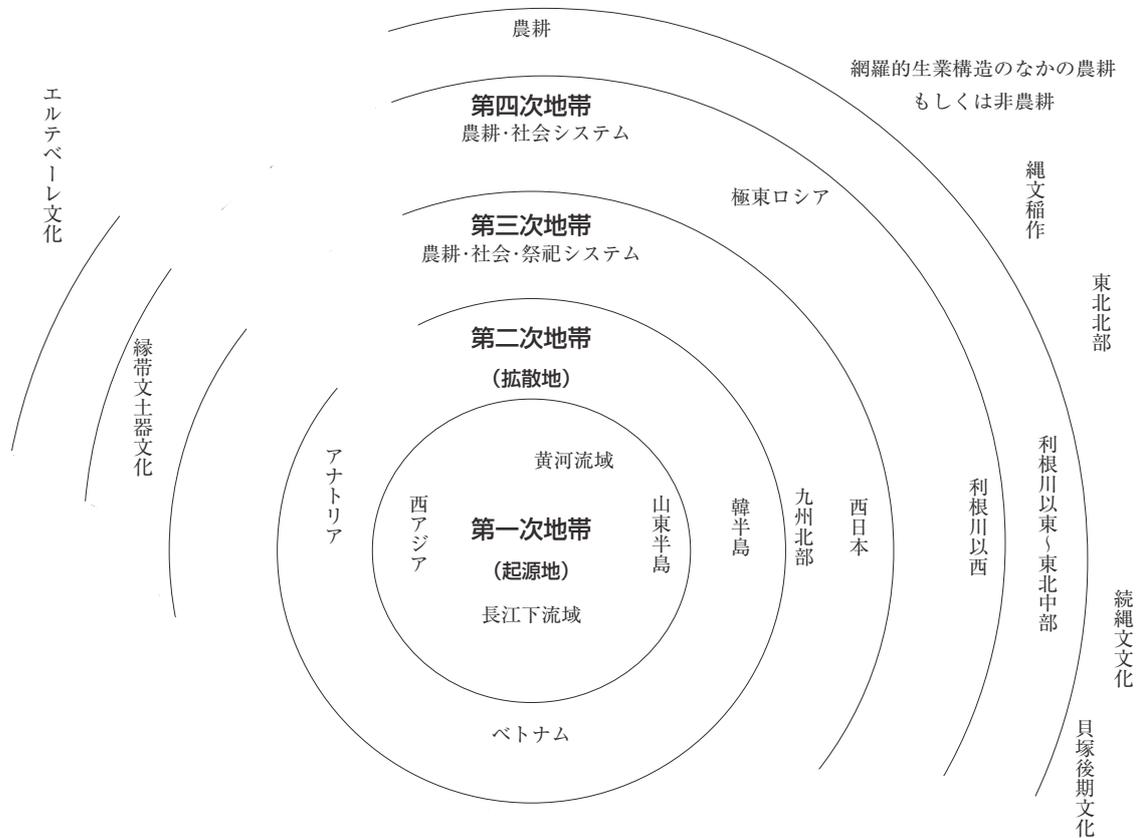


図2 東アジアにおける水田稲作の起源地と拡散地[藤尾 2009b]を修正

もともと野生種が存在していたのに自らは栽培化・家畜化することはなく、起源地から作物や家畜、栽培や飼育技術がもたらされたことを契機として、栽培化・家畜化が始まった地域。野生種がまったく存在せず、起源地から農耕や牧畜を受け入れた拡散地の3つである。

イネの野生種が存在しない日本列島は拡散地だが、同じく野生種が存在しない韓半島も日本列島と同じ拡散地かというところ、そうではない。拡散地のなかには起源地に隣接するところと、複数の拡散地を介して伝わる場所がある。前者が韓半島、後者が日本列島である。こうした起源地から(長江下流域)から複数の拡散地(山東半島, 韓半島)を介して伝わったことが、弥生文化の特徴に大きな影響を与えている。

水田稲作の起源地は長江下流域であるが、弥生稲作に直接つながる起源地は山東半島である(図2)。前2500年頃、湧水を利用した水田稲作が始まるが、当初は生業に占める割合も低くて補助的に過ぎない園耕段階にあった[宮本2009]。本格的な灌漑式水田稲作が山東半島で始まるのは、前1500年頃と考えられている。韓半島で前11世紀に始まる水田稲作の起源地こそ山東半島なのである。

山東半島は野生のイネこそ分布しないが、長江下流域から北上したイネをもとに、灌漑式水田稲

作を前 2500 年頃に作り出した地域であることは間違いない。ある程度の寒冷化にも耐えうる水田稲作を、品種的にも農耕技術的にも作り上げ、水田稲作を園耕段階から生業全体のなかで特化するまで高め、もはや戻ることのできない生産基盤として位置づけた地域こそが山東半島なのである。その意味で山東半島は、日本列島など中緯度地帯における水田稲作文化の起源地といっても過言ではないだろう。

山東半島起源の灌漑式水田稲作は、韓半島西南部において遼寧式青銅器文化と結びつき、社会面・祭祀面を定型化した水田稲作社会を、前 11 世紀の青銅器時代前期末には成立させる。首長墓に副葬される青銅器がそのことを物語っている。つまり韓半島は、灌漑式水田稲作という面においては拡散地であっても、青銅器文化という面を組み合わせる新しい文化を創造したという面では、弥生文化の起源地という両方の性格を合わせ持っている。

前 10 世紀後半、遼寧式銅剣を祭礼具とした灌漑式水田稲作を生産基盤にもつ人びとが九州北部に渡ってくる。この祭祀的まとまりは玄界灘沿岸地域に限定してみられるが、豊穡を祈る農耕祭祀は、前 7 世紀になって西日本全体へと広く定着していき、最終的に北陸から東海地方まで拡散する。水田稲作の拡散とは文化複合体の拡散であり、水田稲作という生業面だけが広がるといった単純な話ではない。在来人も文化複合体を受け入れるために、それまでの労働組織を再編成して、もはや後戻りできないような体制になった上で水田稲作を開始するのである。日常的な農耕祭祀も例外なくこの地域までは広がっている。

以上のように、山東半島で創造された中緯度灌漑式水田稲作を生産基盤とする複合的な稲作文化は、山東半島で農耕社会化を達成。渡海先の韓半島で遼寧式銅剣を祭礼具とする祭祀的側面を組み込む。やがて渡海して九州北部に到達。韓半島南部と九州北部には遼寧式銅剣を象徴とする農耕社会が根付いていく。西日本から利根川までの地域には、農耕祭祀を行う農耕社会として 4～500 年かけて拡散。さらに北には農耕社会化を達成できたのかどうか明確でない、北関東や東北地方の稲作文化が広がる。

九州北部に成立した水田稲作社会は、中緯度灌漑式水田稲作という経済的側面を山東半島に、社会面や祭祀面の特徴を韓半島西南部に祖型をもつ文化であったことがわかる。山東半島を起源地と見なした場合には、韓半島西南部を介して水田稲作が広まった地域なので間接的な拡散地となり、農耕や祭祀的側面に華北型雑穀農耕や北方式青銅器文化の色濃い特徴を内包しているのである。

農耕の起源地と拡散地という視点で検討した結果、弥生文化は農耕の第二次地帯（韓半島）に隣接して存在し、水田稲作を生産基盤とする社会組織を受け入れ、縄文以来の伝統を加えて創られた文化という位置づけが可能である。文明の中心から遠く離れていた結果、文明の暴力を直接受けることなく、ゆっくりとした社会の複雑化を保証された地理的位置にあったという点で、ベトナムとは異なっている。

前 4 世紀には九州北部や中国・四国・近畿・東海で、武器形青銅器や銅鐸を指標とする青銅器祭祀が始まり、前 3 世紀になると福井～天竜川を結ぶ線まで東進して、基本的な東限となる。更に東へ行くにつれて、祭祀的側面、社会的側面の順に横断的な側面は欠落していき（見えなくなり）、利根川を越えると祭祀的側面と社会的側面の存在を確認することはできない。これは日本列島のような起源地からみて東方向への文化拡散だけにみられるのではなく、沿海州方面にもみられる。また

オリエントを起源地として、アナトリアを介しヨーロッパ中央、北海沿岸へと向かうルート上でも共通してみることができる。

## (7) 前後する文化との関係

次に時間的に前後する縄文文化や古墳文化と、弥生文化との違いを見てみよう。続縄文文化や貝塚後期文化との違いを横からの視点とすれば縦からの視点である。

弥生文化を「大陸・半島から移住してきた人びとがもち込んだ灌漑水田稲作農耕と連動する一連の社会システム」の存在として、縄文文化と区別するのは山田康弘である〔山田 2009 : 179 頁〕。一連の社会システムとは社会文化と精神文化に分かれ、前者には排他的テリトリーの成立を象徴する環壕集落と武力による問題解決という、新しい思想の生起を意味する集団的戦闘行為の発生。後者には土器埋設祭祀「生と死と再生・豊穰」という、循環的思想に基づいて発現・施行させる土器埋設祭祀の消滅と、稲魂を運ぶ容器として機能して送り返すといった用途を担った鳥形木製品をあげる。

つまり一連の社会システムとは「弥生化」のプロセスが認められることに他ならず、弥生文化の地域性とは、弥生化のプロセスにみられる違いということになるから、弥生化への複雑化がみえない利根川以東の地域を弥生文化の枠内で捉えることはできず、あくまでも弥生文化とは別の文化、ということになる。

弥生文化に後続する古墳文化は政治史的観点から弥生文化と区別されてきたし、現在もその点に変わりはない。特に古墳時代の前半期を経済的側面で弥生文化と区別することはできないからである。3～4世紀の古墳前期は名実ともに変化した5世紀以降とは異なり、集団的催眠状態による巨大古墳築造の時代として位置づけられていて、汎列島の政治同盟が初めて形成された時代とはいえ、各地の社会段階や政治関係には大きな差異があり、汎列島の統一化された時代にはほど遠い段階であった〔土生田 2009〕。

つまり弥生文化と古墳文化（特に前半期）を分けているのは、生産・経済的な側面ではなく、地域ごとの差が著しかった祭祀・葬制・宗教が汎列島の共同幻想にとりつかれて、首長層が同じ墓制をとり同じ祭祀を行うに至った点にある。

以上、時間的に前後する縄文・古墳文化と弥生文化を比較した結果、両文化との違いを次のようにまとめることができる。縄文文化は、各地域の生態系に適した農耕を含む食料獲得手段を、網羅的に組み合わせた生業構造に特徴があり、祭祀にみられる地域性はあまり顕著ではなく等質的であった。弥生文化は弥生稲作に特化する選択的な生業構造をもつため、生態系をも改変する点が縄文文化との最大の違いで、葬制や祭祀にも地域性が顕著だった。古墳文化の特に前半期は、生産基盤という面では弥生文化と変わらなかったが、葬制と祭祀が汎列島の共通していた。

すなわち弥生文化は経済・社会・祭祀的側面において縄文文化とは完全に異なり、祭祀的側面において古墳前半期と区別できる文化ということができよう。したがって弥生文化にみられる縄文文化の伝統とは、土器製作技術、土器の形態や文様、打製石鎌・石錐・打製石斧といった打製石器の技術、木器や骨角器とその製作技術、漆器とその技術、勾玉など、選択的な生業構造や社会の仕組みに抵触しない技術ばかりということになる。逆に思想、信条、農耕祭祀など、弥生文化の生業構

造や社会の仕組みに抵触する縄文文化の上部構造は、基本的に引き継がれていない。

## (8) まとめ

旧石器文化を除くと最後に設定された先史文化である弥生文化は、設定に際してつねに縄文文化や古墳文化との違いが意識された。縄文文化との違いは、農業や金属器などのハードウェアの存否で区別する段階から、社会の仕組みや祭祀など、システムの違いとして区別する段階に至っている。ところがシステムは大陸系の要素であることもあって、縄文系の要素が取り上げにくい傾向があるため、東日本では水田稲作という指標1つで、弥生文化を規定する傾向がある。

同じくアジア地域で水田稲作を行う諸文化との違いを、縄文文化の系譜を引いている点に求める東日本の研究者は、水田稲作の存在で弥生文化と捉えるのに対して、西日本の研究者は、長江下流域からの距離に応じて減じてくる大陸系譜の要素の濃淡を根拠に、弥生文化を考える傾向がある。

アジアや時代という横と縦の視点から弥生文化の特徴について見た結果、やはり89頁2行目に先述した定義「弥生文化とは、灌漑式水田稲作を選択的生業構造の中に位置づけた上でそれに特化し、一端始めれば戻ることなく古墳文化へと連続していく文化である」が妥当であると判断されたので、この規定があてはまる弥生文化はどの範囲にみられるのか、次章で検討する。

## ③……………弥生文化の質的要素—横と縦のボカシの地域・時期について

これまでも弥生文化は、安定した弥生文化として「中の文化」にくくられてきたが、弥生長期編年になっても1つにくくることができるのであろうか。この章では弥生長期編年に基づいて「中の文化」を3つの側面、すなわち経済・社会・祭祀的側面で再検討する。参考までに「中の文化」の周辺も含めてみたものが図3である。

### (1) 西日本

九州北部では前10世紀後半に、韓半島に向き合う福岡・佐賀の玄界灘沿岸地域に位置する平野の下流域で弥生稲作（灌漑式水田稲作）が始まる。前9世紀後半には早くも福岡平野に環壕集落（那珂遺跡）が出現するほか、戦闘行為がもとで死亡したと考えられる死者が葬られた支石墓（糸島市新町遺跡）がみられるようになる。福岡市板付遺跡では、前8世紀になると副葬品（玉）をもつ小児甕棺墓地が現れ、しかも副葬品をもっていない小児墓地よりも集落の中心近くに造営されることから、階層性がすでに萌芽していると考えられている [山崎1990]。前6世紀には遼寧式銅剣の形を模したという説のある木剣が比恵遺跡から見つかっており、青銅器自体は出土していないものの、祭祀に伴う祭儀を木剣で代用していたと推定されている [吉留編1991]。前4世紀後半（中期初頭）になると、福岡市吉武大石遺跡のような銅剣・銅矛・銅戈や多鈕細文鏡を副葬する王墓が出現するのである。

こうした動きは熊本県宇土半島から大分市を結ぶ線より北の九州中部でもみられる。これらの地域では弥生稲作の開始こそ前7世紀前葉と遅れるものの、前6世紀には佐賀県吉野ヶ里遺跡などで環壕集落が成立。青銅器の副葬は九州北部とほぼ同じ、前4世紀後半に始まる。



同じ九州南部でも宮崎と鹿児島では様相が異なる。弥生稲作は九州中部とほぼ同じ前7世紀前葉には鹿児島県薩摩半島や宮崎市内などで始まる。環壕集落は前期後半の宮崎市下郷遺跡で出現し、以後、継続するが、鹿児島東部では前3世紀に比定される鹿屋市西ノ丸遺跡(山ノ口Ⅰ・Ⅱ式)など、<sup>(6)</sup>明確なものは限られている。青銅器も鹿児島県野井倉遺跡の中広銅矛、大隅で中広銅戈が、宮崎では2点見ついているだけなので、九州北・中部の青銅器祭祀圏内とは明らかに様相を異にしている。

中四国地方でもっとも早く弥生稲作が始まるのは、前8世紀末葉(Ⅰ期古段階)の高知平野で、田村遺跡では同時に環壕も掘られている。瀬戸内では前7世紀前葉に今治市阿方遺跡などで弥生稲作が始まり、前7世紀中頃には環壕集落が現れる。前6世紀中頃には徳島で弥生稲作が始まっている[藤尾ほか2010]。したがって瀬戸内沿岸では愛媛から徳島まで、ほぼ50年ずつズレながら弥生稲作が広がったようである。山陰では、あまり測定例がないために時期が正確ではないが、前7世紀前葉には山口、島根、鳥取で弥生稲作が、前6世紀中頃には環壕集落が成立している。中四国地方の青銅器祭祀は前4世紀前葉の銅鐸祭祀からである。近畿でもっとも早く弥生稲作が始まるのは前7世紀後半～前6世紀前葉の神戸市本山遺跡で、古河内潟沿岸では前7世紀後葉、奈良盆地では前6世紀後半頃に弥生稲作が開始される。環壕集落は前6世紀中頃、青銅器祭祀は前4世紀前葉に出現する。

以上のように、九州北部に続いて弥生稲作が始まるのは、前8世紀末葉の高知平野である。前7世紀前葉には九州南部や瀬戸内西半部と山陰で始まる。同じ九州島内にある鹿児島や大分よりも先に高知で弥生稲作が始まるのが注目される。近畿地方では西部瀬戸内より50年ほど遅れて神戸付近で始まり、古河内潟沿岸、奈良盆地へと東へ広がって行く。

この結果、弥生稲作が広がるにあたってもっとも時間を要したのが、九州北部を出るまでに要した200年あまりという事実は、中部瀬戸内、近畿が50年ずつの時間で広がっていることと比較すると、拡散の仕方に何らかの違いがあったことを予想させる。

## (2) 伊勢湾以東・以北の東日本

前6世紀後半に伊勢湾沿岸地域まで広がった弥生稲作が次に向かったのは北陸で、前4世紀前葉(前期末)には富山市付近に達している。環壕集落も前3世紀(Ⅲ期)には出現し、銅鐸祭祀は福井まで広がり、のちに青銅器祭祀の北限となる。

このあと水田が現れるのは前4世紀前葉の東北北部の日本海側沿岸で、「中の文化」の域外である。青森と富山の間にある新潟・山形・秋田には、今のところ水田稲作を行っていたことを示す遺構は見られない。前4世紀後半(Ⅱ期)には仙台平野や福島県いわき周辺など、東北の太平洋沿岸でも水田稲作が始まり、前3世紀(Ⅲ期)には木製農具も現れて水田稲作が定着していたと考えられる。しかし利根川を越えると環壕集落ははまだ見つかっておらず、後3世紀(弥生Ⅵ期)になってようやく会津地方に方形周溝墓が作られる程度である。青銅器祭祀はもちろん見ることはできず、木の鳥や木偶などの農耕祭祀に使われる木製品もはまだ見つかっておらず、農耕社会が成立していたのかどうかははっきりしない。

前5世紀前半に伊勢湾沿岸まで到達していた弥生稲作が、太平洋沿岸を東へ延び始めるのは弥生中期中頃の前3世紀後半になってからで、小田原市中里遺跡に突然環壕集落が出現する。東播磨の土器が見つまっていることから、石川日出志は東部瀬戸内との間を行き交う人びとを介して、それ

まで丘陵寄りに居を構えていた在来の人びと（再埋葬を営む）が平野に進出し、集住して作った村と考えている〔石川2010〕。前2世紀（Ⅳ期）になると、東京湾に面した神奈川・東京・千葉など関東南部でも環壕集落が出現することから、農耕社会が成立したものと考えられる。その東限は千葉県佐倉市大崎台遺跡である。なお環壕集落が利根川を越えて北に広がることはなく、北限は新潟県村上市の山元遺跡（Ⅴ期）である。北信地域でも前2世紀頃（Ⅳ期）に大橋遺跡など環壕を備えた農耕集落が出現し、ほぼ同じ時期の柳沢遺跡では、武器形祭器と銅鐸の埋納坑が見つかることから、青銅器祭祀が特定の村で行われていたことがわかる。銅鐸祭祀の東限は福井から天竜川を結ぶ線までなので、飛び地的にみられる東日本唯一の青銅器埋納を行った遺跡である。面的に広がったり時期的にも継続したりしないので、あくまでも一時的な現象にとどまるものと推測される。

石川日出志は、北信では弥生青銅器文化の出現と同時に、銅戈や石戈を模した文化が重層的なあり方をみせ、まさに柳沢遺跡を頂点とする、弥生青銅器文化、石器模造品文化（一時的模倣品）と位置づける。この一時的模倣品も利根川を越えることはなく、環壕集落の分布と一致している。一方、後期後半になって加賀・中部・関東一円に現れる小銅鐸・巴形銅器・有鉤銅釧は、後期末になると東海から南関東、さらに北関東まで現れるが、弥生青銅器祭祀との関係は今のところ微妙で、前方後円形・後方形墳丘墓の出現動向とあわせて考えてみる必要があるという。かねてより弥生青銅器祭祀との関連が取りざたされていた有角石器は、今のところ青銅器文化とはいいがたいという評価である。<sup>(7)</sup>

仙台平野以北になると、弥生的祭祀を物語る資料はなく、種耨祭祀ぐらひはあった可能性は指摘されているものの、詳細は不明である。石川は環壕集落がない以上、農耕祭祀以上の村・共同体レベルを包括する弥生祭祀は欠落する可能性が高いという。

このように関東南部と中部地域は本州のなかでももっとも遅れて弥生稲作が始まった地域で、環壕集落は成立するが、青銅器祭祀を行う集団が存在したのは今のところ中信地域だけである。また仙台以北では水田稲作を早く始めるものの、農耕祭祀以上の共同体祭祀は行われていなかったようである。

### (3) 3つの指標の分布

以上みてきたように、「中の文化」のなかには、一度始めた水田稲作をやめた地域は存在しない（図4）。

社会的側面の指標である環壕集落は、基本的に九州南部（宮崎）から利根川以西（佐倉～村上）の地域に分布し、「中の文化」の大部分に認められる（図5）。関東北部～東北中部には認められず、わずかに弥生終末期の会津盆地に方形周溝墓が認められるに過ぎない。環壕集落は弥生終末期に姿を消し古墳時代には継続しない。

祭祀的側面は、青銅器祭祀が九州中部から福井～天竜川を結ぶ線までと、中信に点在してみられるほか、環壕集落が分布する中部・関東南部には村・共同体レベルを包括する弥生祭祀が想定されている（図6）。利根川以北の北関東や東北において、農耕祭祀など日常の豊穰を祈る儀礼がまったくなかったとは考えにくい、今のところ証拠が出土していない。

青銅器祭祀の終焉だが、まず山陰や岡山で前3世紀ごろから衰退し始め、大型墳丘墓を造営し、



図4 食糧生産を基礎とする生活を送る地域と諸文化



図5 環壕集落の分布



図6 青銅器祭祀の分布

そこを舞台に行う祭祀に重点をおくようになる。結局、武器形青銅器を用いる祭祀が2世紀一杯、銅鐸を用いる祭祀が東海地方で2世紀一杯、近畿でも3世紀に入って見られなくなり、弥生青銅器祭祀は終焉を迎える。

#### (4) 3つの側面からみた地域的なまとめ

以上、経済（水田稲作）、社会（環壕集落）、祭祀（弥生祭祀）という3つの側面の組み合わせを通時的にみると、前3～前2世紀の日本列島は5つの地域的なまとめに分けることができる（図7）。

- 九州中部～北陸・東海西部 3つの側面のすべてを認めることができる。祭祀は特に青銅器祭祀が行われている。
- 中部・関東南部、宮崎 農耕社会は成立している。青銅器祭祀は、柳沢遺跡など一時期だけ限定的に認められるだけだが、環壕集落の分布域なので、村・共同体レベルを包括する弥生祭祀は存在したと考えられる。
- 鹿児島、北関東～東北中部 一度始めた水田稲作を継続するので、経済的側面だけは継続して



図7 三つの側面から見た日本列島

認められる地域である。しかし環壕集落や青銅器祭祀は一時的に見られるか（鹿児島），会津盆地を除くとまったくみることはできない（北関東～東北中部）。農耕社会化していたのか，はっきりしない。

- 東北北部 灌漑施設を備えた定型的な水田で300年近くも稲作を行うが，前1世紀にみられなくなる地域。採集狩猟生活にもどったと考える研究者が多く，水田稲作民がどこかへ移動してしまったとは考えられていない。
  - 北海道，薩南～奄美・沖縄諸島 水田稲作を採用せず，生態系に適応して漁撈活動にある程度特化した地域。南海産の大形巻貝を媒介にした交流によって必需財や威信財を手に入れていた。
- この結果，弥生期の「中の文化」は五つに分けることができた。最後に北の文化と南の文化。のこりは北のボカシの地域。東北中部は水田稲作を継続するが，農耕社会化が進んでいるのかどうかははっきりしない。

北海道と奄美・沖縄諸島を除けば，灌漑式水田稲作を行っているわけだが，九州から東北にかけての地域では，地域によってみられる横断的な側面が異なるのはなぜであろうか。どうして環壕集落が成立したり，しなかったりするのでしょうか。

考える糸口になるのが生業全体に占める水田稲作の位置づけである。縄文文化のように網羅的な生業構造のなかの1つとして農耕（水田稲作）が行われていたのか、それとも弥生文化のように水田稲作に特化した選択的な生業構造のなかにあったのか、という点である。これは単に経済上の面だけではなく、社会全体に関係してくる問題である。つまり、水田稲作を行うためには経済面だけではなく、社会的にも祭祀的にも水田稲作に特化する、すなわち水田稲作を行うためにもっとも効果的な社会や祭祀体系を求めていく必要がある。そうした状態になってこそ、環壕集落が出現し、弥生祭祀が行われるのである。

しかし弥生祭祀の有無や環壕集落の有無といった違いを持ちながらも、灌漑水田稲作を一度始めたらやめずに継続した「中の文化」では、後3世紀中頃から後半にかけて、ほぼ同時に古墳文化が成立するのである。社会の複雑化や弥生祭祀が進まなくてもほぼ同時に前方後円墳を造り、古墳祭祀を行うところに、古墳文化成立の特質が隠されていると考えるが、この問題はまた後述する。

## (5) 縦の「ボカシ」の時期

東北部にみられる水田稲作は、網羅的な生業構造のなかで行われていたと考えられているが、網羅的な生業構造といえば縄文文化特有のものである。実は縄文文化のなかで水田稲作が行われていた可能性が指摘されている地域がある。つまり水田稲作が生業全体のなかで特化する以前に、網羅的な生業構造のなかで水田稲作が行われていた可能性である。

まず九州北部の弥生早期に併行する時期の瀬戸内や近畿である（図3のB）。前9～前8世紀の愛媛県大淵遺跡では磨製石庖丁と磨製石鎌、丹塗磨研壺が、香川県林・坊城遺跡では九州北部系の木製農具が、伊丹市口酒井遺跡では磨製石庖丁と靱痕土器が、それぞれの地域の晩期突帯土器に伴って見ついているため、晩期末の水田稲作の可能性が説かれている。

次に九州北部の晩期最終末（図3のA）、黒川式段階にも韓半島青銅器文化前期の磨製石庖丁が見つかった北九州市貫川遺跡、九州南部晩期最終末の湧水を利用した水田遺構が見つかった都城市坂元A遺跡などがある。これらはもし稲作が行われていたら弥生稲作出現以前の網羅的な生業構造のなかでではないかと予想され、狩猟、採集、漁撈などに対して特化していなかったと考えられる。現状では確実に水田稲作を行っていたという決め手に欠けてはいるものの、もし行っていたとしたら、このような稲作形態が予想される。

こういう視点で関東・甲信の前8～前3世紀の状況を見てみよう（図3のC）。石川日出志はこの時期、水田稲作が行われていたと考えている〔石川2000〕。神奈川県中屋敷遺跡で見つかった前4世紀前葉（前期末）に併行するコメは、遺跡近辺の水田で作られたと推測しているのである。その形態は、縄文後・晩期以来の多角的（筆者の網羅的）食料源獲得経済の一環として、雑穀にコメを加えたものという理解である〔石川2010〕。先述した設楽の縄文系弥生文化の地域と一致している。

弥生前期～中期前半に併行する時期の、関東甲信にみられる網羅的な生業構造のもとで行われた水田稲作を、石川や設楽は弥生文化に含める。縄文に特徴的な網羅的な生業構造にあっても、水田稲作が行われた結果、壺の比率が上がったり、男女の分化を意味する土偶型容器が創造されたりで、もはや縄文文化の範疇では捉えられない、というのが根拠である。山内の続縄文文化の考え方に近い。このような見方が成り立つなら、先述した図3-Aや同Bの時期はどのように理解すればよい

のであろうか。

水田稲作に伴う道具が断片的とはいえ出土したAやBの段階は、すべて縄文晩期末の文化として考えられているが、Cの地域との違いは大量の炭化米や雑穀が未検出である点にある。A、Bとも隣接する韓半島南部や九州北部という、併行する時期の水田稲作文化の影響を受けて、採集や狩猟に水田稲作を加えた、網羅的な生業構造を持っていた可能性は否定できない。同様に隣接する伊勢湾沿岸の弥生前期文化の影響を受けた関東甲信（C）も同じ文化的背景をもつとみてよい。

したがってもしCを弥生文化に含めて考えるならば、少なくとも弥生早期に隣接するBは縄文系弥生文化の範疇に含めて考えることも可能になってくるのではないかと思うが、いかがであろうか。筆者は水田稲作を網羅的な生業構造の一部にもつ縄文文化が、あってもよいと考えているので、かならずしもBやCを弥生文化のなかで考える必要ないと思う。かといって縄文文化の範疇にはいらないことは山内清男の言説からも明らかである。弥生早期に併行する段階は晩期で、弥生前期に併行する段階以降が弥生というのではなく、共通の基準で考える必要性があるのではないだろうか。続縄文文化の考え方を北海道だけに限定しなければ続縄文文化でもいいし、鈴木信がいうように類弥生文化でもよい[鈴木2010]。ただ日本における弥生文化の始まりを考える上でも、弥生文化にふくめて考えることには、賛同できない。

#### ④……………「中の文化」の細分

これまでの分析で、「中の文化」のなかには、水田稲作を生業構造のなかにどのように位置づけるのかによって、選択的な生業構造のなかで特化するところと、網羅的な生業構造のなかにとどまるどころの2つがあることをみてきた。水田稲作の広がりとともに弥生文化や続縄文文化などの範囲が、どのように拡大するのか、縦の「ボカシ」の時期を意識しながら、時期ごとにみていこう。

#### (1) 文化的まとまりの時期別変遷

前10世紀後半の弥生稲作の開始から、後3世紀中頃の定型化した前方後円墳の成立までの約1200年間を4つの段階に分けて考えてみた。まず弥生稲作が九州北部だけにみられる段階と、弥生稲作が玄界灘沿岸を出て東海～北陸以西に広がる段階（第一段階）、東北地方で水田稲作が始まり、北海道に続縄文文化が成立する段階（第二段階）、関東甲信でも弥生稲作が始まって本州全体に広がった段階（第三段階）、最後が東北北部で水田稲作がみられなくなり、水田稲作の北限が東北中部まで後退した段階（第四段階）である。弥生稲作が始まる前には、縦の「ボカシ」の時期を各地でみることができる。

##### 1 第一段階(弥生早期～前期後半)

前10世紀後半、九州北部玄界灘沿岸地域で弥生稲作が始まる(図8)。図3-Aはこれ以前のこの地域の話である。前8世紀後半までの約200年間は玄界灘沿岸地域の外には広がらないので、それ以外の日本列島には縄文晩期末文化と貝塚前期～後期文化が広がっている。ただし、瀬戸内のように水田稲作が生業の一部に取り入れられていた可能性のある地域、すなわち西日本に縦の「ボカシ」



図8 第一段階(弥生早期～前期後半:前10～前5世紀)



図9 第二段階(弥生前期末～中期前半:前4～前3世紀)



図10 第三段階(中期中頃～後半:前2～前1世紀)



図11 第四段階(中期末～後期末:前1～後3世紀)

(図3-B)の時期をみることができる。

前8世紀末から前5世紀中ごろまでの約500年間で、弥生稲作は玄界灘沿岸を出て東海西部地域までの西日本全体に広がる。東日本にはまだ弥生稲作は広がっておらず、雑穀栽培や畑稲作など筆者のいう縦の「ボカシ」の時期が広がっているが、石川は弥生前期～中期前半、設楽は縄文系弥生文化とよび、弥生文化のなかに含めて考えている。東北や北海道にはまだ縄文晩期末の文化が広がっていて、奄美・沖縄地方では貝塚前期文化から後期文化への移行が終了する。

## 2 第二段階(弥生前期末～中期中頃)

水田稲作が北陸や東北北部、仙台平野、福島県いわき地域などの東北地方の数ヶ所で始まる段階で、北海道には続縄文文化が成立する(図9)。関東甲信地方には依然として筆者のいう縦の「ボカシ」の時期(図3-C)が広がっている。一部で水田稲作が行われるという説もあるが、畑稲作や雑穀栽培は確実に行われている。再葬墓や土偶形容器のように、もはや縄文文化とはいえない祭祀的な要素が多く認められることが、もはや縄文文化ではないことを示す重要な要素と考えられている。

## 3 第三段階(弥生中期中頃～後半)

弥生Ⅲ期後半(中期中頃)に南関東、Ⅳ期に甲信で弥生稲作が始まることによって、本州・四国・九州全域で水田稲作が行われている段階である(図10)が、水田稲作の目的や生業のなかにおける位置づけは異なっていた可能性がある。図7に示したような藤本が想定した「北の文化」「中の文化」「南の文化」が並立するのはこの段階になってからである。先述したように「中の文化」は、環壕集落が分布する利根川以西の農耕社会化した地域と、北関東・東北中南部、鹿児島のように環壕集落が見つかってなくて、農耕社会が成立しているのかどうか明確でない地域に2大別される。後者の場合、水田や集落を見る限り、網羅的な生業構造の一部に水田稲作が組み込まれていたとは考えにくいこともあって、農耕社会化の途上にある文化という位置づけもできる。ただ、村や共同体を包括する弥生祭祀が行われていた可能性がかなり低いことや、後述するように水田稲作の目的が異なっていた可能性が指摘されているので、弥生文化の範疇に含まれるかどうかはまだわからない。いずれにせよ、弥生稲作の開始により関東甲信地方にみられた縦の「ボカシ」の時期は消滅する。

## 4 第四段階(弥生中期末～後期末)

東北北部には水田稲作を行う人びとはみられなくなり、水田稲作の北限は山形から仙台平野を結ぶ線まで南下。同時に続縄文文化が南下し、続縄文人は日本海沿岸を新潟～石川まで達し、西日本の弥生人と直接、接している可能性が指摘されている。貝塚後期文化は11世紀半ばまで継続する(図11)。

この結果、「中の文化」は青銅器祭祀を行う北陸～天竜川以西と、基本的に行わないが弥生祭祀を行っている可能性のある関東南部・中信地域、と宮崎に。共同体祭祀を行っていない可能性のある北関東～東北中部、鹿児島の3つに分けることができる。しかし3世紀中頃～後半には「中の文化」全体が古墳文化へ移行する。

### (2) まとめ

4つの段階にわたって「中の文化」の動向をみてきた。「中の文化」の南の境界は、貝塚後期文化の北限がほぼ固定化されているので、前10～後3世紀の間、変動することはなかった。

それに対して「中の文化」の北限は変動していた。九州北部で弥生稲作が始まってからの約500年間は、伊勢湾沿岸や北陸まで拡大する一方であったが、中部・関東方面へは前3世紀まで150年ほど停滞する。関東甲信の縦の「ボカシ」の時期に阻まれていた。もちろん東北北部には海上ルートで北陸から直接伝わるが、目的や実体面からみて弥生稲作とはいえるものではなかった。

次に動きが始まるのは、弥生Ⅲ期後半～Ⅳ期（前3世紀中頃後半）の関東南部や甲信における弥生稲作の開始である。これを契機に水田稲作の範囲は東北北部までつながったように見える。このうち、もう後戻りをしなかった東北中部までを、藤本は「中の文化」と規定したわけだが、東北北部で行われていた水田稲作と北関東の水田稲作は、そもそも同じ系譜上で捉えていいのかどうか疑問が残る。東北北部では前4世紀に砂沢遺跡で始まった水田稲作の流れを引くと考えられる水田稲作が、田舎館遺跡などで行われていたので、一見、「中の文化」が東北北部にまで達したように見え、またそう理解してきたわけだが、ここは慎重に考えてみたい。

もう後戻りをしないと定義されている「中の文化」の北限は、東北中部の仙台・大崎平野にある。高瀬克範は仙台平野の水田稲作を「設備投資型」とよび、西日本の装備を一通り求め、確保される効率性や生産性に目をつけたものと理解している [高瀬 2004]。一方、後戻りする東北北部の水田稲作を「経費節約型」とよび、縄文文化とほとんど変わらない装備で稲作を行い、道具製作にかかるコストを抑制し、ひいては稲作開始期のリスク軽減を意図していると理解する。このように好対照をみせる東北北部と東北中・南部の水田稲作であるが、利根川以西の水田稲作地帯にはみられない点で共通点をもつ。それは、拡大再生産の意識と弥生祭祀がみられない点である (図 12)。

祭祀については先に触れたので、ここでは拡大再生産について斎野裕彦の言葉を借りて説明しよう。これは土地に対する意識といってもよいものだが、仙台平野は一定の期間、一定の範囲にとどまって耕作することこそがもっとも重要視され、条件の悪いところまで含めて可耕地開発を行う西日本のあり方をみることはできないという。津軽も一定の生産量を確保できるならばそれ以上水田域を拡張することはせず、むしろ特定の範囲に一定期間とどまることを重要視するという [斎野 2004]。

かつて林謙作は、東北北部と中・南部の水田稲作について、縄文以来の労働組織や石材供給システムを維持したまま水田稲作を行った東北北部では、寒冷化によって生業を元に戻せたのに対して、組織やシステムを改変した上で水田稲作を行った東北中南部は、すでに戻ることができなかつたと指摘している [林 1993]。

また広瀬和雄は東北北部の水田稲作を「東北北部型の弥生文化」と命名し、「各地域集団の領域は広大であったため相互の利害が接触しがたい。したがって地域集団間における秩序形成のための政治的契機は醸成しにくかった」 [広瀬 1997: 90 頁] と述べたが、広大であったからではなく、もともと可耕地に対する考え方が異なっていた可能性が、斎野や高瀬によって指摘されていることの意味は大きい。拡大再生産の意識が希薄であるということは、水田稲作の目的自体が異なっていた可能性を示唆している。

これまでは、東北中・南部の水田稲作を関東南部以西の水田稲作と同じと考えてきたが、ここで見方を変えて、目的も意識も異なる水田稲作と考えてみたら、東北北部と東北中・南部の前1世紀に見舞われた寒冷化に対してみせた異なる動きは、どのようにみえるのであろうか。

弥生文化にとってのコメは、食糧にとどまらず、余剰生産物、交換財、儀礼・祭祀の対象（稲魂）、税など、多様な性格を持っていたと予想される。また拡大再生産こそが目的であり、可耕地の拡大に努め、その結果、土地争いに発展することもある。特に九州南部（宮崎）～南関東の地域においてはその傾向が強かったと考えられる。

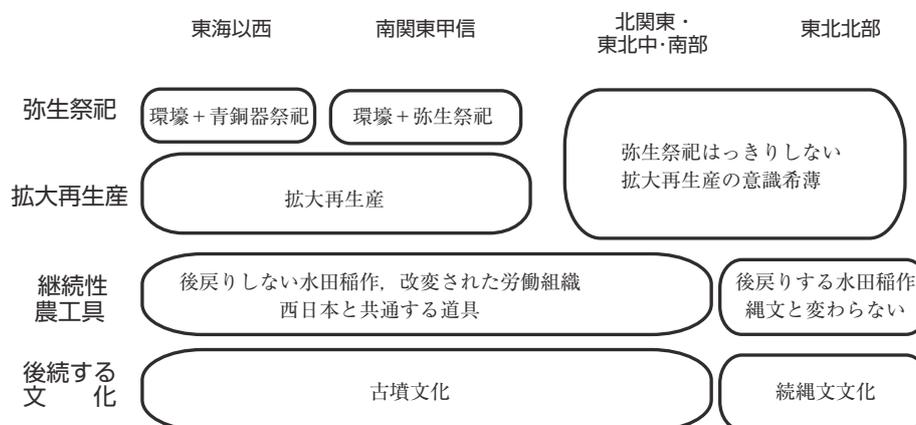


図12 東日本における水田稲作文化の特徴

ところが、先述したように仙台も津軽も、何が何でも耕地を増やしていくといったところがみられない。東北北部ではギフトや食料、集団を結びつけるための手段〔高瀬 2004〕としての性格が強く、食料の一部にとどまっていた可能性が指摘されている。つまり食料としての面ではなく、集住化の達成が目的で水田稲作を始めたという理解である。

斎野裕彦は、仙台平野の水田稲作について、寒冷地に適応した水田であっても、成人一人あたりの熱量は8～22%で、補助的な役割を果たしているのに過ぎないため、狩猟活動が減った分、漁撈活動が再編成され、水田稲作の不足分を補ったと考えている〔斎野 2004〕。そのため漁撈活動に専業することになり、東北中部以北では土器製塩も盛行するという。仙台平野でさえも、網羅的な生業構造の一つとして水田稲作が位置づけられていた可能性を示している。

結局のところ、水田稲作が網羅的な生業構造のなかの一つとして位置づけられていたところでは、水田稲作を行う目的が異なっていた可能性が認められることからわかるように、地域によって水田稲作を行う目的はさまざまであった可能性<sup>(8)</sup>がある。

横の「ボカシ」の地域であろうが、縦の「ボカシ」の時期であろうが、双方の特徴が混在する地域や時期は普通にみられるものである。縄文から弥生への転換期を縦の「ボカシ」の時期とすれば、文明の中心から周辺へと離れて行くにつれて当初の要素が一つずつ欠落していくのが横の「ボカシ」の地域であった。そうした地域や時期固有の文化内容についての共通認識は研究者間にあるので、要はそれぞれの地域や時期をどのように理解して、なんとよぶのかの問題なのである。

つまり前380年頃から始まった東北北部の水田稲作は、社会面の改編を行わずに開始され、温暖期という好条件にも恵まれて、田舎館遺跡につながる水田稲作を継続できたが、前1世紀以降に始まったとされる寒冷化を前にして、旧体制のままの労働組織を維持していたことが幸いして、もとの採集狩猟生活に戻ることができた。もともと網羅的な生業構造の1つに位置づけていた水田稲作ゆえに、別の生業で補うか、バランスを変えればよかったのである。逆に東北中・南部は、水田稲作に特化した生業構造に見合う社会面の改編を行っていたため、寒冷化しても容易に水田稲作をやめることはできない。元に戻ることはできずに、水田稲作を継続せざるを得なかったのではないだろうか。このように北関東～東北中部と東北北部では、生業構造や労働組織に違いが寒冷化に対し

て異なる行動をとらせた原因と考えられる。

このような想定が可能だとすれば、「中の文化」の北端は、前3世紀にいたってようやく最北端（東北中部）に達し、以後、固定化され、古墳文化へ移行することとなる。すなわち「中の文化」の北端も南端も一度到達した地点で後退することなく、弥生文化の間は固定化されたことになる。逆に東北部では、前期末以降の温暖な段階に水田稲作を網羅的な生業構造の一部に取り込み、後期以降に寒冷化すると水田稲作をやめたことになる。すなわち東北部は、生業を固定化せず、状況に応じて網羅的生業構造内のバランスを変えることによって、環境変化に対峙するという、生態系にもっとも適した生業体系を維持していたといえよう。

前稿〔藤尾2011〕では、東北部は採集狩猟生活→農耕生活→採集狩猟生活とめまぐるしく生活スタイルを変える、「ボカシ」の地域と位置づけたが、実は縄文文化と同じく、生態系と環境にあわせて生業バランスをこまめに調節した文化といえるのである。温暖期から寒冷期への気候変動の影響を、直接受ける東北部ならではの適応戦略であり、拡大再生産を至上命題とするゆえに、何が何でも水田稲作をやめることができない弥生文化とは、本質的に異なる文化だといえるのではないだろうか。一方、南の「ボカシ」の地域について、藤本は古墳文化の段階から顕在化するとしてきた。鹿児島では、定型化した水田や木製農具が見つかるわけではないが、水田稲作が行われていることは確実である。しかし大河川が流れる宮崎とは異なり、「<sup>きこ</sup>迫」とよばれる台地上に小規模な水田を拓き、湧水を主に利用するため、水の給排水に伴う集団間の調整が必要とされていない。鹿児島では、大隅半島の肝属川流域を除けば、社会的側面の改変まで及ぶような農耕社会化は起きていなかった可能性は高い。<sup>(9)</sup>一方、宮崎では前期後半以降、環壕集落が普遍化することから、弥生文化段階は「中の文化」の領域に含まれていたと考えている。

### (3)「中の文化」の輪郭

これまで検討してきた結果、安定した水田稲作がもっとも拡大した前3～前2世紀（弥生中期中頃～中期後半）の日本列島上には、図13にみるように「中の文化」を含めた4つの文化的まとまりが存在していたことがわかった。この時期は、生業構造のなかにおける水田稲作の位置づけや、水田稲作の目的はともかくとして、灌漑式水田稲作が九州・四国・本州全体に広がっていた時期である。

縄文文化がすでにみられなくなったこの時期、列島内に存在した文化的まとまりは、どのような特徴をもっていたのであろうか。共通点と相違点を明らかにする。

図13に示した文化的まとまりの特徴を表1に示した。生業構造のなかにおける水田稲作の位置づけ、農工具のあり方、環壕集落や方形周溝墓、青銅器祭祀の有無、耕地拡大についての姿勢、後続する文化の違い、などを指標に、この時期の北海道から沖縄までの列島内を4つの文化的まとまりに分けた。

弥生稲作を生産基盤とする選択的な生業構造を持ち、環壕集落を指標とする農耕社会化を達成した文化をIとして、青銅器祭祀を行う北陸・東海以西～九州中部までをIA、青銅器祭祀を基本的に行わないが、弥生祭祀を行っていた可能性のある利根川以西の関東甲信と九州南部（宮崎）をIBとする。よって違いは青銅器祭祀を行い大陸的要素の強いIAと、基本的に青銅器祭祀を行わないIBということになるが、いずれも3世紀半ばに前方後円墳を築造する。農耕社会化という弥生化

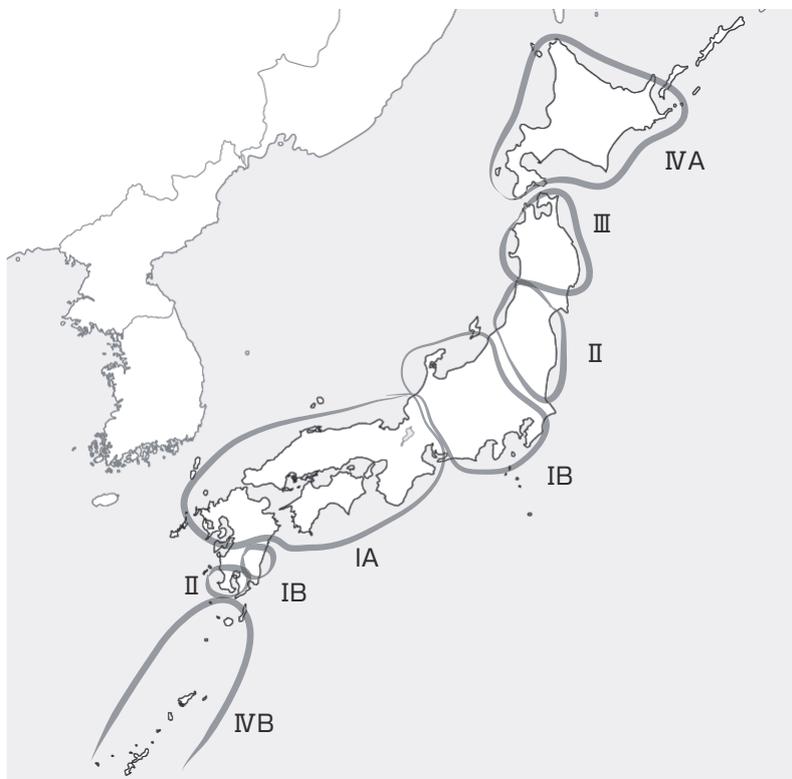


図13 前3～前2世紀の諸文化

表1 日本列島上に存在した4つの文化の特徴(前3～前2世紀)

	地域	経済的側面	社会的側面	墓制(副葬制)	祭祀的側面	後続の文化
I A	東海・北陸以西～九州中部	灌漑式水田稲作, 畑作	環壕集落, 方形周溝墓, 戦い	副葬制	青銅器祭祀, 木の鳥, 木偶	古墳
I B	南関東甲信越, 宮崎			V期の群馬	有角石器, 小銅鐸, 顔面付土器	
II	北関東～東北中部, 鹿児島		労働編成の質的転換	栃木, 茨城	小銅鐸, 岩偶	
III	東北北部	400年間, 水田稲作	縄文の労働組織を継承		土偶	ボカシの地域
IV A	北海道	漁撈に基盤をもつ採集狩猟, 交易	個人崇拜?	副葬制		続縄文
IV B	薩南・奄美・沖縄諸島		有力者の存在	種子島のみ		貝塚後期

を深化させた社会が政治社会化して、古墳文化を創造して移行した地域ということができよう。従来の弥生文化として理解された内容をもつ。

次に水田稲作を生産基盤とする生活を基本とするが、環壕集落が顕在化せず、弥生祭祀を行っていた可能性が少ない地域をIIとする。利根川以東の北関東や東北中・南部、鹿児島が該当する。青

銅器祭祀は基本的に見られないものの、武器形青銅器の祭祀を行う地域に隣接した九州南部では、中広銅矛と中広銅戈が断片的に認められる。北関東、東北中・南部では、青銅器以外の弥生的な祭祀の道具（鳥形木製品、卜骨、刻骨、木偶など）も基本的に明確ではない。しかし労働組織や石器流通の仕組みなどの社会的側面を、水田稲作用に再編成しているの、どんなに気候が寒冷化しても採集狩猟生活に後戻りすることなく、水田稲作を継続する。会津盆地のように方形周溝墓が造られるまでに社会の複雑化が進んだ地域もあるが、基本的に社会の複雑化が十分に進む前に、前方後円墳を築造したと考えられる。これは前方後円墳築造の背景を考える上でも重要である。

以上のように「中の文化」の範囲と一致するのがⅠとⅡの地域であり、藤本がいうとおり「もはや後戻りしない文化」なのである。

本州の最北端では前4世紀から前2世紀にかけて300年ほど水田稲作を行っていたが、そのあとは行わなくなり、網羅的な生業構造のなかから水田稲作が欠落する(Ⅲ)。水田稲作は網羅的な生業構造のなかの1つとして位置づけられ、労働組織も流通機構も縄文晩期の体制のまま再編成されなかったことが、環境変動にあわせて水田稲作を行わなくても、やっていくことを可能としたと考えられている[林1993]。祭祀的側面に縄文文化を色濃く残すことは少なくなったとはいえ、田舎館遺跡でも土偶が伴うことから推測することができる。

以上、水田稲作を生産基盤として後戻りすることなく、古墳文化へ移行する点を共通項とする文化として設定された藤本の「中の文化」は、農耕社会化を達成して弥生祭祀を行っていることが明らかで、利根川～九州南部(宮崎)までのⅠ地域と、達成したかどうかははっきりしないまま古墳文化へ移行した利根川以北～東北中部、鹿児島Ⅱ地域に分かれる。Ⅰ地域はさらに青銅器祭祀の有無で、青銅器祭祀を行うAと行わないBに分かれる。これで弥生文化の横の輪郭は定まった。

以上、前3～前2世紀に限って見ただけでも、九州・四国・本州にはさまざまな文化的まとまりが見られることが明らかになった。となれば、前10～後3世紀までを通して見た時、より時期的・地域的な文化的差異が大きいことから、「弥生文化」という枠組み、「弥生時代」という時代概念が、本当に有効なのか、という石川の本質的な疑問に突き当たらざるを得ない。この問題を考えるかぎを握っているのが、縦の「ボカシ」の時期である<sup>(10)</sup>。この段階を弥生文化の枠内で考えるのかどうかを決めれば、弥生文化の輪郭を決めることができる。

## ⑤……………弥生文化の輪郭

### (1) 縦の「ボカシ」の時期とエピ縄紋

灌漑式水田稲作が始まる前に、稲作を行っていた可能性を示す要素が断片的にみられる段階を、縦の「ボカシ」の時期と称して論じてきた。のちに弥生稲作を行う地域であれば、どこにでもみられるこの段階を、どのように評価すればいいのであろうか。先述したように、東海以西の西日本や東北にみられる縦の「ボカシ」の時期は、縄文晩期末として位置づけられているが、関東甲信にみられる縦の「ボカシ」の時期は、東日本の弥生研究者によって弥生前期とか縄文系弥生文化という、弥生文化の枠の中で理解されていた。この問題を理解する上で参考になるのが「エピ縄紋説」<sup>(11)</sup>である。

林謙作は、時代区分の単位ではなく文化の変遷の段階として、エビ縄紋、を提唱した。「つまり、エビ縄紋というのは、ひとつの地域、あるいはひとつのムラの中に、縄紋系、弥生系の要素が入り混じっていて、弥生系の要素が縄紋系の要素を圧倒できないでいる状態をいいあらわす言葉なのだ。」[林1993:75頁]と定義し、3つの場合を想定した。

- (一) コメをはじめとするハードウェアだけがつたわっている場合（つまり作っていない）。例：縄文後・晩期の穀物や雑穀を持っている場合。筆者の図3-Aに相当。
- (二) 縄文的な社会や生産のシステムのなかにコメの栽培を取り込んでいる場合。さらに二つに分かれる。a 水田稲作を取り入れていない場合（または不明）。例：口酒井、林・坊城、大淵など、筆者の図3-B。b 水田稲作を取り込んでいる場合（つまり行っている）。例：砂沢、田舎館、宮ノ前、坂元A。筆者の図3-C。
- (三) ひとつの地域に稲作を土台としたムラ社会は成立していても、採集狩猟を土台としたムラ社会も健全な場合。例：弥生早期の玄界灘沿岸地域、唐古や中里など各地でもっとも古い水田稲作を行う遺跡が出現した段階。

エビ縄紋と、縄文時代や弥生時代という時代がパラレルではないのは、弥生早期と縄文晩期末が、同じエビ縄紋に相当すると考えられていることからわかるように、弥生系の要素が圧倒的でないことを意味している。すなわち圧倒できればエビ縄紋という文化の変遷段階ではなくなり、弥生文化の範疇にはいるのである。

よって弥生文化とは、弥生的な社会や生産のシステムのなかで水田稲作を行い、それを土台としたムラ社会が成立し、維持するための弥生祭祀を行っている場合、を想定することができる。

石川も設楽も、林のエビ縄紋（二-b）、縄文的な社会や生産のシステムのなかにコメの栽培を取り込んでいる段階、言葉を換えれば網羅的な生業構造のなかで水田稲作を始めた段階（例 東北北部）、も弥生文化と捉えている。それに対して筆者は、エビ縄紋（三）、稲作を土台とした、言い換えれば選択的な生業構造のなかで水田稲作を始めてから以降に限定して弥生文化と捉えているのである。

「縄文から弥生への転換は栽培を含む網羅的な生業体系から穀物栽培を中心とする選択的な生業体系への変化に特徴づけられるのである。」[藤尾1993:1頁]という定義は、今も変える必要はないと考えている。したがって中部関東の弥生は、前3～前2世紀の中里遺跡の成立からで、それ以前はエビ縄紋ということになる。そしてこの点は設楽も同意している。エビ縄紋という点では共通しているのに、弥生文化かどうかで判断が分かれる原因はどこにあるのだろうか。

## (2) 各地のエビ縄紋段階

まず九州北部の黒川式段階だが、1960年代より縄文後・晩期における上部構造の動揺が指摘されてきた。近藤義郎は浅鉢や深鉢にみられる、黒色磨研化という韓半島櫛目文文化への意識的同調性、深鉢の粗製化という社会的労働時間の短縮、土偶・石棒の大量製作といった社会の動揺を抑える精神的な縛りの強化といった現象を指摘し、縄文文化の上部構造は明らかに変化の兆しを見せていると指摘した[近藤1962]。さらに晩期末になると先述したように、韓半島青銅器時代前期文化の水田稲作に伴う石庖丁などが断片的に出現する。コメ自体は縄文後期後半以降、圧痕土器を根拠

に存在したと考えられているが、中沢道彦や安藤広道は認めていない。坂元A遺跡の縄文水田も評価が分かれている。しかしもしこの段階に水田稲作が行われていたとすれば、網羅的な生業構造のなかで行われていたと考えられるので、林のいうように縄文後期後半～晩期末はエビ縄紋段階ということになる。

中国地方は、誰もが認めている板屋Ⅲ遺跡の前池式段階の突帯文土器段階にみられるイネのプラント・オパールを胎土に含む土器、九州北部にもってくと黒川式新段階は、エビ縄紋（一）の段階である。それ以前については今のところ、穀物・雑穀関係の確実な資料は見つかっていない。

岡山では岡山大学学生部男子学生寮から、器種構成に占める割合が数%の壺と大型蛤刃石斧など、エビ縄紋（二）段階がみられる。香川では林・坊城遺跡から木製農具が出土していて、水田稲作の可能性が説かれているが、壺の比率はまだ数%台で低いので、エビ縄紋（二）に位置づけられる。大淵遺跡も石庖丁をもつものの、壺の比率はまだ低いので、エビ縄紋（二）の段階である。以上は図3-B、すなわち縄文晩期末に比定される。

長原遺跡は少なくとも長原式新段階には遠賀川系土器が出現しているので〔藤尾2009a〕、エビ縄紋（三）の段階である。なお船橋式以前は（二）段階となる。

伊勢湾沿岸では馬見塚式段階（弥生早期新段階併行）に補助的手段として稲作が始まったと考えられており、エビ縄紋（二）に相当。弥生稲作は弥生Ⅰ期中段階からである。かたや静岡県宮竹野遺跡のような条痕文土器を使う在来の人びとが、水田稲作を行っていたことが知られている。壺の比率も3割に達しないことから、稲作は補助的な手段と考えられている〔設楽1995〕ので、やはりエビ縄紋（二）に相当する。以上は図3-C、すなわち弥生前～中期に比定されている。

このように九州北東部から瀬戸内、近畿、東海までの西日本の水田農耕社会では、前7～前6世紀までのおよそ150年間、九州北部で創造された、水田稲作の技術、農耕社会の維持・運営の仕方から、弥生祭祀に関する部分までの弥生文化の構造が、忠実に守られていた。そのことが、斉一的な遠賀川系文化として、私たちの目に映ってきたことにつながっていると考えられる。その背景に旧突帯文土器文化圏という、地理的・歴史的に類似した、生態的・技術的・祭祀の基盤を持つ地域圏があったことがわかる。

中部・関東地方でコメの存在を示す証拠が現れるのは、前8世紀初頭（Ⅰ期初頭併行）の浮線文土器段階である。宮ノ前遺跡では、百間川遺跡で見つかったものと同じお手盛りの畦で、1枚あたりの面積を狭くした小区画水田が見つかった〔中山1993〕。突帯文土器の深鉢が変容した深鉢変容壺が出現する。しかし10%以下の割合であり、石器組成も縄文晩期と基本的に変わらないので、エビ縄紋（二）段階に相当する。

Ⅰ期新段階になると、中屋敷遺跡のように大量のコメやアワを貯蔵する遺跡が現れたり、壺の割合も20%台まで上がったりで、水田稲作への転換が少しずつ進んでいることは明らかである。また土偶型容器も出現するなど、浮線文土器を使う人びとの意識に水田稲作を行うにあたって、男女の共同労働が不可欠であるという考え方が芽ばえていたこともわかる。木偶ではなく土偶型容器を用いる点に、縄文的価値観から完全に脱却しきれない精神世界の一端を見ることができ、儀礼や祭祀など精神面が弥生化を始めているところに、社会の基本的な変化をみることができ、エビ縄紋（二）bに相当する。

農耕社会の成立は、中里や池子など大陸系磨製石器や木製農具の出現、土偶の消滅、方形周溝墓が成立する弥生Ⅲ期（前3～前2世紀）である。とくに土偶がⅠ期に稲作を行うようになっても消えなかったのは、土偶に代表される縄文的な祭祀と、網羅的生業構造のなかで行われた水田稲作が両立できたことを意味すると考えられる。

しかしⅢ期に成立する農耕社会や稲作の祭祀と、土偶とは相容れずに廃棄されてしまう。東北部の砂沢や田舎館など土偶が少なくなるとはいつても両立しているところとは、この地域の水田稲作を行う社会を考える際に参考となる。

次に中部高地～南関東の条痕文土器に伴う再葬墓や土偶形容器は、伊勢湾沿岸まで迫ってきている遠賀川系文化に対して、条痕文土器を使用する人びとが社会の動揺を抑えるための精神的な縛りを強化したものである。また条痕文土器の粗製化も労働時間の短縮という視点でみることはできないだろう<sup>(12)</sup>。いずれにしても土器に対するなんらかの考え方の変化が反映されているわけで、これらは西日本の縄文後・晩期にみられた現象と同じ上部構造の動揺にみえてならない。ただ異なるのは神奈川県中屋敷遺跡で見つかった前4世紀段階(前期末併行)の大量の炭化米や雑穀の存在である。貯蔵できるほどの量を生産できていたということは、たとえ網羅的な生業構造のなかで食料獲得手段の一つとして位置づけられていたとしても、縄文文化の枠で考えるのは難しいということであろう。他にも壺形土器や土偶型容器の出現などが縄文文化では捉えられないことを示す証拠としてあげられている。

だからといって弥生文化といえるのかというと、板付遺跡など九州北部の弥生早期に現れる農耕集落との格差は著しいため、やはり弥生文化を認めるわけにはいかない。エビ縄紋に相当する時代区分の用語が必要である。北海道限定という研究史上の枠をひきはがして、続縄文という用語を当てるのがもっとも妥当と考えられる。次に弥生文化の縦の輪郭の終わりもみてみよう。

### (3) 古墳文化への転換

筆者のこれまでの立場は、「水田稲作を選択的な生業構造のなかに位置づけた上で、それに特化し、いったん始めたら後戻りせず、古墳文化へと連続していく文化」を弥生文化と考えてきた。それに対して石川日出志は、縄文文化の伝統と灌漑式水田稲作でしか弥生文化を定義できないと主張する〔石川2010〕。環壕集落のように、大陸文化系統の文化要素を重視するのは、古墳時代に継承されるものを重視する見方だとして石川は批判するが、土生田純之が指摘しているように、弥生文化と古墳前半期の文化を経済的側面だけで区別することができないこともまた明らかである〔土生田2009〕。弥生文化は、縄文文化だけではなく古墳文化とも区別できなくてはならず、そのためにも社会的側面や祭祀の側面を重視しなければならないと考える。

したがって、関東南部で灌漑式水田稲作が始まる以前や、前1千年紀にみられる九州・四国・本州にみられるすべての文化を、縄文文化の伝統+灌漑式水田稲作を同じくする弥生文化の地域性とみる(石川説)か、水田稲作を行うという点では共通するが、水田稲作の目的を異にする文化の集合体とみるのかは、結局のところ、コメの性格や機能を、食料としてだけ位置づけるのか、それとも食料以外の経済価値、祭祀の対象としても位置づけるのかによって、異なってくるのである。

関東北部、東北中・南部を除いた九州・四国・利根川以西の本州が、灌漑式水田稲作を生活の中

心においた選択的な生業構造をもつという点では、研究者の認識は一致しているとみてよいだろう。これは食料獲得手段全体に占める水田稲作の比率が、高いとか低いとかを意味しているのではなく、水田稲作をどのように位置づけているのかという、意識の問題である。武末の言葉を借りれば、農民の意識、こうした共通の方針をもつかどうかの違いである〔武末1993〕。九州南部（宮崎）までの地域では、農耕社会化を達成した上で政治社会化を志向し、やがて前方後円墳の築造へと進んでいく。しかし農耕社会化を達成しているのかどうかははっきりしない地域である、利根川以東～東北中部地域や鹿児島も、前方後円墳の築造へと向かう。

水田稲作の目的の違いにもとづいて、弥生化の程度（複雑化）が異なるとするならば、弥生文化の地域性とみるのか、別の文化としてみるのかはともかくとして、「中の文化」には少なくとも3つの複雑化があったことになる。農耕社会を成立させ東アジア青銅器文化の一翼を担い、青銅器祭祀を行ったⅠA（東海～北陸以西，九州中部）。農耕社会が成立し、弥生祭祀は行ったものの青銅器祭祀まではいかなかったⅠB（関東甲信，宮崎）。社会的にも弥生化を達成できたかどうかははっきりしないⅡ（関東北部～東北中部），鹿児島である。このⅠとⅡに代表される「中の文化」に東北北部までを含めて弥生文化と見なし、みられる違いを縄文以来の伝統に起因して形成された地域性とする石川と設楽。Ⅰを弥生文化，縦の「ボカシ」の時期や目的を異にした水田稲作を行うⅡを別の文化とみなす筆者。考え方はさまざまである。しかし東北北部を除けばいずれの地域も前方後円墳築造という集団催眠へと陥っていく。つまり筆者の定義によれば古墳文化は、弥生文化と、弥生文化ではない文化が、集団催眠に陥ることによって創られた文化ということになる。拡大再生産のうへで階級分化した社会の延長線だけに、古墳文化が生まれたのではなかったのである。

## おわりに

最後に本稿の内容をまとめておく。

藤本強の定義をもとにした最新の弥生文化の定義「弥生文化とは、灌漑式水田稲作を選択的な生業構造の中に位置づけた上でそれに特化し、一端始めれば戻ることなく古墳文化へと連続していく文化である」により、「中の文化」から外れる東北北部の水田稲作文化を、弥生文化の枠外とした。

1. 続縄文文化や貝塚後期文化は、縄文文化の伝統を単に引き継いでいるだけでなく、周辺諸文化との関係に応じて特徴的な内容をもつという点で、すでに縄文文化の範疇からは逸脱している、という山内清男の見方にしたがえば、網羅的生業構造の中で水田稲作を行う場合もすでに縄文文化から逸脱していると考えた。
2. 弥生文化の水田稲作は、選択的な生業構造の中で特化する点を特徴とするので〔藤尾1993〕、網羅的生業構造の中における水田稲作は、時代区分上の概念である縄文文化でも、弥生文化でもない、というのが現状である。ただし、文化の変遷概念としては、林謙作の「エビ縄紋」という考え方に相当する。
3. 現在、網羅的な生業構造の中で水田稲作が行われていたと考えられているのは、前3～後3世紀の北関東から東北中部までの地域である。これらの地域では、環壕集落や方形周溝墓が見つかっておらず、弥生祭祀を行っていた形跡も認められないことから、農耕社会化や政治社会化

を指向しない水田稲作文化と推定されている。水田や木製農具が見つからない薩摩もこの範疇に含まれる可能性は高い。水田稲作のハードウェアこそ見つかるが、ソフトウェアが見つからない文化こそ、エビ縄紋段階にあるといえよう。

4. 灌漑施設を備えた水田こそ見つからないが、ハードウェアの一部が見つまっているのが、前7～前4世紀の中部・関東の条痕文土器文化（大量の炭化米とアワ、湧水型水田）と、前10～前8世紀の西日本の突帯文土器単純段階（大陸系磨製石器、木製農具、丹塗磨研壺、粉痕土器）、前10世紀前半の九州の黒川式段階（磨製石庖丁、粉痕土器、湧水型水田）である。いずれも水田稲作が行われていた可能性があるが、行われていたとしても網羅的生業構造の中であったという点では共通している。いずれも筆者が縦の「ボカシ」の時期とよぶ段階で、エビ縄紋に相当する。
5. 4や5で指摘した地域は、筆者の定義による限り、弥生文化とよぶことはできず、山内清男の定義による限り縄文文化とよぶこともできない。しかし網羅的な生業構造の中であろうが、水田稲作が行われていれば弥生文化と規定する設楽博己や石川日出志は、前7世紀以降の東日本の水田稲作を行う文化を弥生文化とよぶ。したがって彼らにとっては、水田稲作を行っていることが確実なれば、弥生文化の上限は論理的に前10世紀以前にもさかのぼることとなる。
6. 弥生文化の定義を次のように定めた。選択的な生業構造のなかに水田稲作を位置づけた上でそれに特化し、いったん始めたら戻ることなく古墳文化へ連続していく文化である。拡大再生産による農耕社会化、政治社会化していくことが潜在的に組み込まれていた文化であり、それがうまくいくための弥生祭祀というメカニズムをもつ。突帯文土器単純段階以前に水田が見つかって直ちに、弥生文化と認定できないし、縄文文化に水田稲作があってもよいと考える。
7. 弥生文化は、前10世紀後半から後3世紀半ばにかけての日本列島において、最大の領域を占める文化である。存続期間は最大1200年間あまりと長いが、500年間しか続かない南関東など、水田稲作の開始年代によって地域ごとに弥生文化の存続幅には長短がある。
8. 弥生文化は、前10世紀後半からの約250年は、玄界灘沿岸地域にしか広がっていなかったものの、前6世紀中ごろまでには宮崎から伊勢湾沿岸まで広がり、前3世紀には利根川まで拡大して最大の領域をほこる。その後はこの領域を保ったまま、3世紀中ごろに古墳文化へと移行する。
9. 日本列島上には弥生文化以外にも、3つの水田稲作を行う文化がある。1つは前7世紀以降の薩摩、前400年以降の東北中・南部、前4～前2世紀の青森である。さらに水田址こそ見つからないが、その存在が想定されている3つの「ボカシ」の時期がある。現状では異論のある時期もあるが、システムの一部として水田稲作が行われていたわけではなく、ハードウェアだけが取り込まれた、まさにエビ縄紋に相当する。
10. 薩摩や東北中・南部では西日本と同時に古墳文化へと移行する。したがって古墳の成立とは、必ずしも、生産の拡大、農耕・政治社会化の延長線上にないことは明らかである。

筆者がこの問題に取り組んで、はや10年以上がたつ。当初は青銅器祭祀を行う地域を弥生文化と考えていたため、今も関東の弥生研究者からの批判はやまない。しかし弥生長期編年のもとでは、いわゆる縦の「ボカシ」とよんだ時期、特に条痕文土器の存続幅が大幅に長くなったことで、東日

本における定型化した水田稲作が始まるまでの文化のとらえ方を、大きく見直さざるを得なくなってきたのも事実である。網羅的な生業構造のなかに水田稲作を位置づけ、それと相成り立つ、変容しつつある祭祀をもつ文化なのである。

弥生時代がいつから始まるのか、というテーマで初めて論文〔藤尾1988〕を書いたとき、武末氏から厳しく批判されたが、その論点は、突帯文土器単純段階以前に、水田稲作が見つかることも想定しておくべき、という点であった。突帯文土器単純段階以前に、試行例や失敗例などが見つかる可能性もあるため、水田稲作の結果、それがしばらく継続することで社会に質的変化が起きた時、農民の意識が生まれた時をもって弥生時代とすべきではないのか、というのが、その骨子ではなかったかと思う。

それから4半世紀。武末氏が想定された（と私が思える）事例が遠く離れた東北北部で見つかったのである。環壕集落も作らない灌漑稲作を、武末氏が弥生時代の指標として認めた〔武末2011〕ことについては少なからず衝撃を受けたが、私は25年前の武末氏の指摘を現在も有効だと考えて、その立場から本稿を執筆した。西日本、東日本の研究者からのご叱正を賜りたい。

## 註

(1)——本稿は、紀元前10世紀から後3世紀までの約1200年間を存続幅とする弥生長期編年に基づき記述する。従来の年代観の場合は、弥生短期編年と呼ぶことにする。

(2)——九州南部が南の「ボカシ」の文化に入るのは古墳時代からなので、弥生文化に含めて考えている。

(3)——稲作の一連の技術は簡単な模倣によっては得られないので、技術を身につけた人が多少移住したことはあろうが、「しかし、当初の弥生時代の文化の中に縄文文化の伝統の強く残っていること、弥生時代文化のそれぞれの地域における最初の地方色が、縄文時代文化の最後の地方色をだいたい受け継いでいることなどから、縄文時代人の大きな移動などを認めるわけにはいかない。むしろ、それぞれの地方の住民が、農耕技術を受け入れて、弥生時代へかわっていったと考える方が、穏当な考えのように思えるのである。」(139頁)

(4)——佐原真は、「そして現在では、縄文土器、弥生土器、そして古墳時代の土師器と須恵器を製作技術の上で区別することは、ほとんど不可能な段階にまでたちいたっている。〔佐原1975:120頁〕と述べ、古墳時代の土器を土師器とよぶほうが実情に適していると述べている。

(5)——もともと縄文農耕と弥生農耕の違いは、森本六爾が大正時代に的確に指摘していたにもかかわらず〔森本1934〕、忘れたかのような議論が行われていた。森本は、縄文時代の「農業はたとへ在り得たとしても甚だ副次的なものである。」(同22頁)。「かくして私は、其の

農業の存在の仕方が、社会的には支配的であり、社会現象をも支配したと認め得られる所から、弥生式の社会を、原始的ながら一の農業社会と認めたいのである。」(同25頁)。

(6)——鹿児島県の環壕集落は、川辺町寺山遺跡(中期)や鹿児島大学構内遺跡(前期末～中期初頭)などで、壕の一部とみられるものが確認されているが、全体像がわかるものは少ない(新里貴之氏教示)。現在、コーナ部が見つかり巡ることがはっきりしているのは鹿屋市西ノ丸遺跡だけである。

(7)——2010年5月15日に歴博で行われた基幹研究「農耕社会の成立と展開」(藤尾研究代表)において行われた石川の発表内容である。

(8)——沖縄の農業の目的について安里進が興味深い指摘を行っている〔安里2006〕。沖縄のグスク時代の農業は、耕地開発による生産力拡大ではなく、冬作システム、複合経営、集団農業などで、自然災害を回避して、生産の安定化をめざしていたことがわかる。

(9)——鹿児島県埋蔵文化財調査センターの東和幸氏から、鹿児島における水田稲作の特徴についてご教示いただいた。

(10)——筆者は2011年に上梓した『新・弥生時代』の本文の中で、「弥生時代」という用語を基本的に使わなかった。西日本だけで弥生文化を研究する研究者には理解しづらいと思うが、東日本の水田稲作文化を研究している者にとっては、きわめて切実な問題なのである。

(11)——筆者は通常、「縄文」という字を使うが、エビ縄文  
に関してのみ、林の用字に準じる。

(12)——土師器と弥生式土器の違いの一つに、装飾的手法  
がきわめてわずかになっている点や、土器の機能をそ  
こなわない程度に粗雑に仕上げたものが多いことを指摘  
した横山浩一は、こうした「この弥生式土器から土師器  
への転化は、土器自体については退化ともうけとれる現

象であるが、社会全体としてはむしろ発展というべきも  
のである。なぜなら、弥生式土器の豊富な装飾とていねい  
な仕上げは、職人的な熟練によって、時間と労力を節約  
した結果である。」と指摘している〔横山1959:126頁〕。  
このことから土器の粗製化に伴う労働時間の短縮は、一  
般に社会全体としては発展していると考えられるのであ  
る。

## 引用・参考文献

- 安里 進 2006 「琉球—沖縄史をはかるモノサシ—陸の農業と海の交易—」(『地域の自立—シマの力』 下—沖縄から何を見るか 沖縄に何を見るか—, 156-172, コモンズ)。
- 石川日出志 2000 「東北日本の人びとの暮らし」(『倭人をとりまく世界』 68-86, 山川出版社)  
2010 『農耕社会の成立』 岩波新書
- 泉 拓良 1990 「弥生時代はいつ始まったのか」(『争点 日本の歴史』 1, 188-202, 新人物往来社)。
- 宇野 隆夫 1996 「書評 金閻恕+大阪府立弥生文化博物館編『弥生文化の成立—大変革の主体は「縄文人」だった—』」(『考古学研究』 43—1, 104-109)。
- 小林 行雄 1951 『日本考古学概説』 東京創元社。
- 近藤 義郎 1962 「弥生文化論」(『岩波講座日本歴史』 1 一原始・古代—, 139-188, 岩波書店)。  
1985 「時代区分の諸問題」(『考古学研究』 32—2, 23-33)。
- 斎野 裕彦 2004 「東北地方における水田稲作の開始とその展開」(『さあべい』 21, 1-35)。
- 佐原 真 1968 「日本農耕起源論批判—『日本農耕文化の起源』をめぐって—」(『考古学ジャーナル』 23, 2-11)。  
1975 「農耕の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史』 1, 114-182, 岩波書店)。
- 設楽 博己 1995 「中部高地・関東一条痕文土器文化の広がり—」(『弥生文化の成立—大変革の主体は「縄文人」だった—』 180-192, 角川書店)。  
2000 「縄文系弥生文化の構想」(『考古学研究』 47—1, 88-100)。
- 白石太一郎 1993 「弥生・古墳文化論」(『日本通史』 2, 245-285, 吉川弘文館)。
- 杉原 荘介 1977 『日本農耕社会の形成』 吉川弘文館。
- 新里 貴之 2009 「貝塚時代後期文化と弥生文化」(『弥生時代の考古学』 1, 148-164, 同成社)。
- 鈴木 信 2010 「続縄文文化と弥生文化」(『弥生時代の考古学』 1, 129-147, 同成社)。
- ダイヤモンド・J 2000 『銃・病原菌・鉄』 (倉骨彰訳), 草思社。
- 高瀬 克範 2004 『本州島東北部の弥生社会誌』 六一書房。
- 武末 純一 1993 「近年の時代区分論—特に弥生時代の開始を中心に—」(『日本における初期弥生文化の成立』 173-185, 文研出版)。  
2011 「書評 石川日出志著『農耕社会の成立』」(『考古学研究』 58-2, 98-100)。
- 田崎 博之 1986 「弥生土器の起源」(『論争・学説 日本の考古学』 4, 21-52, 雄山閣)。
- 中山 誠二 1993 「山梨県における稲作関連遺跡の現状」(『山梨県考古学協会誌』 6, 18-31)。
- 土生田純之 2009 「古墳文化と弥生文化」(『弥生時代の考古学』 1 一弥生文化の輪郭—, 184-197, 同成社)。
- 林 謙作 1993 「クニのない世界」(『みちのくの弥生文化』 66-76, 弥生文化博物館)。
- 広瀬 和雄 1997 『縄文から弥生への新歴史像』 角川書店。
- 藤尾慎一郎 1988 「縄文から弥生へ—水田稲作の開始か定着か—」(『日本民族・文化の生成 1』 437-452, 六興出版)。  
1993 「生業からみた縄文から弥生」(『国立歴史民俗博物館研究報告』 48, 1-66)。  
1999 「コメのもつ意味」(『新弥生紀行—北の森から南の森へ—』 122-123, 国立歴史民俗博物館)。  
2000 「弥生文化の範囲」(『倭人をとりまく世界—2000年前の多様な暮らし—』 157-171, 山川出版社)。  
2002 『縄文論争』 講談社メチエ。  
2003 『弥生変革期の考古学』 同成社。  
2004 「日本の穀物栽培・農耕の開始と農耕社会の成立—さかのぼる穀物栽培と生産経済への段階—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』 119, 117-137)。

- 
- 2009a「弥生開始期の集団関係—古河内潟沿岸の場合—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』152, 373-400)。
- 2009b「総論 弥生文化の輪郭—時間・地域・年代論—」(『弥生時代の考古学』1, 3-20, 同成社)。
- 2011『新・弥生時代』吉川歴史文化ライブラリー 329。
- 藤尾慎一郎・坂本稔・住田雅和 2010「徳島市庄・蔵本遺跡群出土炭化物の年代学的調査」(『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報』2, 53-60)。
- 藤本 強 1982「続縄文文化と南島文化」(『縄文文化の研究』6, 4-7, 雄山閣)。
- 1988『もう二つの日本文化—北海道と南島の文化—』東京大学出版会。
- 2009『日本列島の三つの文化』市民の考古学7, 同成社。
- 宮本 一夫 2009『農耕の起源を探る—イネの来た道—』吉川歴史文化ライブラリー 276。
- 森 貞次郎 1960「島原半島(原山・山ノ寺・礫石原)及び唐津市(女山)の考古学的調査—終わりに—」(『九州考古学』10, 6-10)。
- 森本 六爾 1934「農業起源と農業社会」(『日本原始農業新論』(『考古学評論』1-1, 18-25, 東京考古学会)。
- 山内 清男 1933「日本遠古之文化7—4 縄紋式以後(完)」(『ドルメン』2-2, 49-53)。
- 山崎 純男 1990「環濠集落の地域性—九州—」(『季刊考古学』31 —環濠集落とクニのおこり—, 57-61)。
- 山田 康弘 2010「縄文文化と弥生文化」(『弥生時代の考古学』1 —弥生文化の輪郭—, 165-183, 同成社)。
- 横山 浩一 1959「手工業生産の発展—土師器と須恵器—」(『世界考古学大系』3 —日本Ⅲ—, 125-144, 平凡社)。
- 吉留秀敏編 1991『比恵遺跡群10』福岡市埋蔵文化財調査報告書 366。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2012年4月16日受付, 2012年7月23日審査終了)

## **The Frame of the Yayoi Culture : Is Wet Rice Cultivation with Irrigation System an Indicator of the Yayoi Culture?**

FUJIO Shin'ichiro

This paper has defined the Yayoi culture as “the culture of performing Yayoi rituals for progress towards formation of agricultural society as a production base, placing wet rice cultivation with irrigation-system within a selective occupational structure, and preservation thereof” and has given consideration to the frame of the Yayoi culture, namely the regions and timing to which this culture applies.

To begin with, we established a lateral frame extending from wet rice cultivation with irrigation system and the existence of moat settlements and square tombs surrounded by moats, through to the Miyazaki-Tone River regions where the existence of Yayoi rituals can clearly be recognized. We then established a vertical frame starting from the wet rice cultivation with irrigation-system placed within the selective occupational structures in each region, and extending to the establishment of ancient tombs. As a result, it has been understood that the preceding definition applies to the northern part of Kyushu from the late 10th century BC, western Japan (excluding the northern part of Kyushu) from the 8<sup>th</sup> to 6<sup>th</sup> century BC, and the Chubu and southern Kanto regions from the middle of the 3<sup>rd</sup> century BC.

Therefore, it is clear that the Yayoi culture was extremely restricted in terms of regions and time periods, and that the Yayoi culture cannot be regulated by wet rice cultivation with irrigation-system alone. Although up until now ancient tomb culture had been perceived as a continuation of the Yayoi culture, this definition establishes that ancient tomb culture is separate from the Yayoi culture. This is because we now know that keyhole-shaped tumuli were produced in western Japan at roughly the same time as production in the northern part of Kanto to the central Tohoku region and in Kagoshima.

Therefore, while the previous understanding that society and rituals became the Yayoi in nature as a straight line extension of growth in productivity can be applied in the region westward of the Tone River, it cannot be applied in Kagoshima and the region northward from the Tone River. Ancient tombs were established at roughly the same time in regions where the Yayoi culture was politically socialized after agricultural socialization, and in regions where political socialization did not occur but wet rice cultivation with irrigation system was conducted within a comprehensive occupational structure. Contained herein a clue that enables understanding of the establishment of ancient tombs.

Key words: Yayoi long-term chronology, bokashi (shading) culture, comprehensive/selective occupational subsistence structure, expanded reproduction

---